

東北学院大学

「宗教活動報告書」

第 20 号

(2018年度)



天国はからし種に似ている。
成長すると空の鳥が来て枝に
巣を作るほどの木になる。

(マタイ13:31・32)

巻頭言

2018 年度	第 63 回教職員修養会	1
2018 年度	第 23 回キリスト者教員研修会報告	55
2018 年度	第 44 回サマー・カレッジ報告	65
2018 年度	宗教活動報告	67

東北学院大学

「光の後に」

宗教部長 野村 信

今年の5月に、本学の創設に貢献された二人の校祖の出身校であるランカスター神学校から、ランダル・ザッカマン教授が来仙され、「闇の後に光あり (post tenebras lux)」という主題のシンポジウムの中で講演された。この「闇の後に光あり」とは、聖書の中のヨブ記17章13節から取られたフレーズであり、宗教改革の運動が広がる16世紀ヨーロッパの、特にジュネーヴにおいて用いられた用語であった。当時、この都市が教皇を頂点としたカトリック教会から袂を分かち、プロテスタントの福音主義の教えに則って教会を形成し、多くの困難や戦いを経て、ようやく安定した教会行政と市民生活を樹立した後、人々が口にするようになった言葉である。

今日では、この言葉は、一般の人々も、また映画の題などにも使用される比較的身近な言葉として受け止められている。なるほど、闇の後に光が到来するという理解は、聖書の創世記第1章やイザヤ書9章1節、第2コリント4章6節にもあるが、決して聖書だけの理解というわけではなく、現実の世界の中で、苦しみや悲しみを乗り越えて幸いな時が到来することにもこの表現は使われる。

しかし、いずれにしても気になるのは、「光の後はどうなるのか」という次の段階である。つまり、「光の後に再び闇が到来する」のかということが気にかかる。確かに、歴史は繰り返し、昼はいずれ夜を迎え、奢れる者も久しからず、万物栄枯盛衰の定めから免れるものはない。にも拘わらず、私たちは、「光の後」を問うのである。果たして光の後には闇が来るという定めを克服する道はあるのだろうか。あるとしたらどのような取り組みが考えられるのだろうか。

例えば、企業について考えてみれば、多くの企業が優良企業としてランクインしても、何十年という年月の後に、業績不振で凋落し、新しい企業が台頭してくるのを見る。企業もいわば「生き物」であり、盛んな時があれば、いずれ衰える時が来ることを予感させられる。

しかし、比較的浮き沈みの幅が小さく、光の状態を持続させている企業がある。それは、内部において、絶えず刷新し、古いものを新しいものに変えるという自助努力を怠らない場合である。これは大きな企業であればあるほど難しく、動きが鈍くなり、既存の状態を継続しようとする傾向がある。そこで大ナタを振るい、新しい目標に向かって挑戦していく英断が求められる。

さらに、もう一つの取り組みがあろう。すなわち絶えず内部で光が輝いているという場合である。つまり、光が衰えない場合であり、内側からの輝きが広がり、直面している課題や問題を一つ一つ解決し、闇が来ようとも、むしろその中でより鮮やかに輝くという仕方である。「光の後に闇があり」というのは万物の定めであるが、闇が濃ければ濃いほど、小さな光が尊く、貴重なものとなることも否めない。

本学は、「地の塩、世の光」、「命、光、愛 (Life, Light, Love)」を建学の精神を表すモットーとして掲げている。興味深いことに、両者に「光」が共通しているが、「キリストが光」(ヨハネ 8:12) であるから当然のことである。しかも「キリストの光」すなわち、「神の光」であれば、たとえ闇が広がろうとも、その闇を克服することが出来る光であり、この光こそが命であり、まことの光 (1 ヨハネ 2:8) である。

周囲が明るい時代には、小さな光は気づかれず、役に立っていないように見えるが、周囲が暗くなる時、光が輝いているということは心強い。今の時代は、日本の社会全体が少しずつ暗くなりだしているという思いを抱いている人は少なくない。キリスト教会の伝道の広がりも、洗礼を受けてクリスチャンになる人も減少している。しかし、そのようなことに動揺したり、将来に不安を抱く必要はない。むしろ、どんな時代でも、「時が良くても悪くても」(2 テモテ 4:2) 福音を宣べ伝え、神の光、命の光に照らされ、むしろ力づけられ、希望をもって進む道が与えられている。その幸いを心に留めて、私たちの歩みをさらに前進させていけるよう神に祈りたい。

2018 年度

第 63 回教職員修養会報告

第 63 回東北学院大学教職員修養会プログラム

日 時 2018 (平成 30) 年 9 月 3 日 (月) ~ 9 月 4 日 (火) 1 泊 2 日
会 場 アクティブリゾート宮城蔵王 (旧: 宮城蔵王ロイヤルホテル)
〒989-0916 宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉字鬼石原 1-1 TEL: 0224-34-3600

主 題 『聖書に聴く』
講 師 学校法人関西学院 院長
田淵 結先生

9月3日 (月)

9:00 土樋キャンパスホーイ記念館西側より送迎バス出発
10:00 受 付
10:30 開会礼拝 司会: 吉田 新先生
説教: 松本 宣郎学長
奏楽: 今井奈緒子先生
学長挨拶
講師紹介
11:00 講 演 演題: 『キリスト教学校のプレゼンス 旧約聖書から考える』
講師: 田淵 結先生
司会: 木村純二先生
12:00 質疑応答
12:25 オリエンテーション
12:30 昼 食
13:15 各部屋チェックイン
14:00 グループ懇談『講師講演をめぐって』
15:00 休 憩
15:30 全体懇談『「東北学院英学史年報」にみる東北学院の英学』
司会: 藤原佐和子先生
担当: 平河内健治先生
18:00 夕 食
19:30 自由懇談

9月4日 (火)

6:30 朝 食
チェックアウト
9:00 朝 拝 司会: 阿久戸義愛先生
説教: 田淵 結先生
奏楽: 今井奈緒子先生
10:00 全体協議・報告会
司会: 阿久戸義愛先生
12:00 閉会礼拝 司会: 野村 信先生
奏楽: 今井奈緒子先生
閉会挨拶
12:30 昼 食
13:30 解 散 (ホテル前より送迎バス出発)
14:30 土樋キャンパスホーイ記念館西側送迎バス到着

第 63 回東北学院大学教職員修養会開会礼拝奨励

【開会礼拝】

讃美歌：第 537 番

聖書：新約聖書 ペトロの手紙Ⅰ 第 1 章 3 節～ 9 節

説教：『生き生きとして』

讃美歌：第 541 番

司会 大学宗教主任 吉田 新

〔新約聖書 ペトロの手紙Ⅰ 第 1 章 3 節～ 9 節〕

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

『生き生きとして』

学長 松本 宣郎

今年も恒例の、東北学院大学教職員の修養会を開催できたことを感謝したいと思います。東北学院大学に着任して、修養会ごとにお話をする機会が与えられましたが、今年が多分最後になるだろうと思います。6年間、礼拝の度ごとに語り続けてきたと同じことを、また今日もお話しようと思います。

ところで、今年の夏は、あまり海外旅行をする体力的な自信がなくなってきたものですから、見残していた地中海、世界のどこかへ旅行しようと思ひまして、フランスの南部、プロヴァンス地方へ行きました。ここは私がずっと専門としてきた古代ローマの、歴史の遺産・遺跡がたくさんあるところで、その一部を見てくることができました。その遺跡の一つ、リヨンという遺跡のことです。リヨンはプロヴァンス地方よりはちょっと北になるのですが、立派な街です。ここには古代ローマの劇場があり、歴史博物館があり、それなりの見物する価値があるところなんです、やや離れたところにある遺跡、そこがリヨンへ行ったときに私がぜひ行きたいと思っていた場所でした。それはリヨンの闘技場。闘技場というのは、ローマのコロッセウムと同じジャンルの建物になります。楕円形で、コロッセウムの場合は4万5千人収容できる座席がありますが、リヨンの場合はもっとずっと小さかったでしょう。もっともこのリヨンの闘技場は、世界遺産のローマ時代の観光スポットからは外されていて、古いただの広場みたいな形で佇んでいる、そんな場所でした。しかも古代の闘技場があったのに、だんだん方々から建物が建てられて、闘技場自体が幼稚園の運動場くらいの大きさまで削り取られていました。それでも座席などが残っていて、古代遺跡だとはっきりわかるし、ここで古代の闘技場があったのだという説明書きもついていました。なぜ、このみすばらしい闘技場に私がこだわっていたかと言うと、リヨンのこの闘技場で、2世紀、177年、キリスト教徒たちが、突然のようにリヨン市民から追い立てられリンチに合い、当局に突き出されて、裁判を受けて、「おまえはキリスト教徒か？」あるいは、「神々と皇帝を礼拝してキリストを呪うか？」というようなテストをされて、あくまでキリスト教の信仰を守ろうとした人々が、処刑され、殉教したということです。ある書物によると、この闘技場で48人のキリスト教徒が殉教した。そういう記録が文書でも残っている。そういう場所だったからです。

3世紀の前半まで、ローマ帝国、地中海世界周辺からブリタニアに至るまで生きていたキリスト教徒たちは、四六時中ではありませんけれども、いついかなる時に、キリスト教徒に敵意を持つ人々によって攻撃され、迫害されてもおかしくない、そういう状況にあったということでもあります。その爆発した例が177年、リヨンだったわけです。

さて、今日お読みいただいた新約聖書のペトロの手紙は、これは読んでいただいた吉田先

生の専門領域であることはご承知かと思うのですが、私の知ってる知識によりますと、ペトロの名前が冠されておりますけれど、キリストの使徒ペトロ自身が書いたものではなくもう少し後の時代、それも初期のキリスト教徒が、今申しました迫害にさらされている時代にキリスト教徒たちを励ます、教会の中でしっかりと信仰を守ろう、迫害に耐えて、たとえ死を迎えても、神が救いを用意してくださるという風な思いを込めてペトロを名乗る別人が書いたのではないかと、それにふさわしい文章のように私には思えます。最初の1章3節のほうから見ていきますと、ここにはある意味、迫害にさらされ、あるいは冷たい目にさらされ、かつ社会のごく少数者として生きていた人々がどのような信仰、どのような精神、心を持ってその状況に耐えていたか、耐えられたか、そのことを示していて、あるいは耐えるためには何をわきまえておくべきか、そのことを示している箇所のように思えます。まず始めに、あなた方、つまりそういう迫害にさらされている人々に対して、その存在・生き方がキリストによって大転換した、と教える、そのような文章があります。私たちは新たに生まれたのだ、それは死者の中からキリストが、殺されたけれど復活したことによって、あなた方は新たに生まれた。あなた方は今生きている、しかしいつ迫害され殉教させられるかわからない。しかし新しく生きている。キリストのおかげで生き生きとした希望を持って生きているのだと、そのように転換を迫られるところから文章は始まります。そして、天に蓄えられている宝という、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐのだ、日々の仕事の稼ぎや、商売をして、あるいは土地を持っていてその上がりもあってある程度貯め、あなた方は、ある程度喜んでいるだろうけれども、そのようなものが本当の財産ではないのだ、ということをごここでは告げられているのです。そして、そのように価値の転換をしてあなた方は生きていくのだけれども、あなた方の生きている時はやがて終わる。その終わりがただ単に病気で死ぬという、そういう終わりだけではなくて、そもそも終わりの時がやがて来るというのです。つまりそれが終末の時、このことについても語られます。どんなに苦しかろうが、そして殉教の死であろうが、老いて死のうが、病気で死のうが、生まれてすぐ死のうが、その死は、最初、第1の死であって、本当の最後はキリストが告げられる終末の時である。そのように言うのが第5節であります。

このようにして、ペトロの第1の手紙は語りかけます。ローマ帝国の中において迫害を受けかねない人々にそのような時は苦しいけれども、生き生きと、希望を持って生きよう。なぜならそれは復活のキリストがまた来られる最後の時が用意されているからだ。そのような言葉を語りかけ、最初のキリスト教徒たちに励ましが与えられるわけであります。このようにして考え方、生き方の転換を迫られ、苦しくとも生き生きと喜んで生きなさい、と人々は勧められます。なぜならキリストの復活に支えられてあなた方は最後の時が来ることを知っているから、その時に救いが用意されているからだ、というのです。最後に、あなた方はキリストを見たことがない、と言われます。このペトロの手紙に書かれたキリスト教徒たちは、イエスが死んでから数十年あるいは百年近い時間を経てからの人々でした。当然イエ

スはまだこの世にいない。しかし彼らは知っている、その死に方が尋常な死に方ではなく、十字架で死んだキリストはしかし復活した、そのおかげであなた方は生きられるのだ、あなた方はキリストを見ていないけれど知っているのだ、キリストを愛することによって生き生きと生きることができるのだ。そういう風に結ばれています。ペトロの手紙が書かれた、キリスト十字架と復活以後百年くらいのキリスト教徒にこのように語られた。それを、二千年後の我々に書かれた言葉としても受け止めたいと思います。二千年経って、キリスト教徒は世界中にいます。しかしまだ終わりの時は来ていない。それはいつどこだとも、聖書には書いていない。しかし待つ時間はずっと続いています。まさに最初のキリスト教徒のように私たちはまだ来ない時を待って生きています。しかし、生き生きと生きよという聖書の言葉は、私たちにもそのまま励ましとして与えられるべきものなのです。現代は、キリスト教徒であるからといって信仰を試され、クリスチャンならば死刑だという、そういう時代ではありません。しかし、私たちの周りには価値観の多様性があり、世俗化があり、戦争の絶え間ない社会でもあります。ある意味で、私たちがまさに命の危険にさらされている状態というのは、ある意味で古代と変わらないといえるでしょう。そのように不安があり、希望が持てないような世界にいる私たちにこのペトロの手紙が、あなた方は皆生きている、キリストを愛している、喜んで生きる。なぜ喜んで生きられるか、それは、あのイエス・キリストが死んでも復活した、今は天におられ、最後の時に来られる、その準備が今なされている。だからあなた方はいかなるときにも喜んで生きることができるのだ。その同じメッセージを私たちは知っておかなければならないと思います。われわれ東北学院の者たちもその二千年の歴史の中にいます。キリストを間接的にしか知らない、また心の中で受け入れることができないとしても、東北学院につながる全ての人に対して、このメッセージは語りかけ、励ましになる言葉であると私は信じています。今の時が苦しくとも、キリストの復活がある限り、それは過ぎ去るものであるし、あるいはいずれ終わるものであるし、そもそも最後の時にあなた方は救いを約束されるのだ、今は必ず来られるキリストを信じよ、と。

お祈りをします。神さま、今年もこの蔵王の地に、当学院の者たちを集めてくださり、しばらくの間、静かな思いでもって、永遠のこと、キリストの時のこと、あるいはまたキリスト教学校に働くものとして生きること、そのことに思いを致す機会を与えられ感謝いたします。何よりも遣わされて、この修養会の講演者としておいでになった田淵先生を上げまし、メッセージを伝えさせていただく、そのような働きをさせてください。修養会の開会にあたって、これらの願いと感謝を、主イエスキリストの御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。

主題講演「聖書に聴く」

『キリスト教学校のプレゼンス』

学校法人関西学院院長 田淵 結 先生

講師略歴

田淵 結

(たぶち むすび)

学校法人関西学院 院長

1950 (昭和25) 年 11 月 5 日 生まれ

学 歴

- 1973 (S48) 年 3 月 関西学院大学文学部史学科卒業
1973 (S48) 年 4 月 関西学院大学神学部学士編入学
1975 (S50) 年 3 月 関西学院大学神学部卒業
1977 (S52) 年 3 月 関西学院大学大学院神学研究科修士課程修了
1980 (S55) 年 3 月 関西学院大学大学院神学研究科博士課程単位取得満期退学
1987 (S62) 年 7 月 Department of Biblical Studies, Faculty of Theology,
Kings College, London University minimum requirement 修了

職 歴

- 1977 (S52) 年 11 月 日本基督教団神戸丸山教会担任教師 (昭和 56 年 3 月迄)
1978 (S53) 年 4 月 日本基督教団神戸丸山教会付属丸山小羊幼稚園 園長
(兼務、昭和 56 年 3 月迄)
1981 (S56) 年 4 月 関西学院大学文学部助手 (宗教主事) (昭和 57 年 3 月迄)
1982 (S57) 年 4 月 関西学院大学文学部専任講師 (宗教主事) (昭和 60 年 3 月迄)
1985 (S53) 年 4 月 関西学院大学文学部助教授 (宗教主事) (平成 3 年 3 月迄)
1991 (H 3) 年 4 月 関西学院大学文学部 教授 (宗教主事) (平成 21 年 3 月迄)
1997 (H 9) 年 4 月 関西学院大学宗教主事 (平成 22 年 3 月迄)
1999 (H11) 年 4 月 関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程指導教授
(現在に至る)
2000 (H12) 年 4 月 関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程指導教授
(現在に至る)
2004 (H16) 年 4 月 関西学院宗教総主事 (平成 28 年 3 月迄)
2007 (H19) 年 4 月 関西学院会館館長 (平成 28 年 3 月迄)
2009 (H21) 年 4 月 関西学院大学教育学部教授 (宗教主事)
(現在に至る。宗教主事は平成 28 年 3 月迄)
2010 (H22) 年 4 月 関西学院千里国際キャンパス統轄 (現在に至る)
2014 (H26) 年 4 月 関西学院宗教センター長 (平成 28 年 3 月迄)
2016 (H28) 年 4 月 関西学院院長 (現在に至る)
2016 (H28) 年 4 月 関西学院高中部長 (平成 29 年 3 月迄)
2016 (H28) 年 4 月 関西学院初等部長 (現在に至る)

団体歴

- 2006 (H16) 年 4 月 学校法人関西学院理事 (現在に至る)
2013 (H25) 年 4 月 学校法人関西学院評議員 (現在に至る)
2016 (H28) 年 4 月 一般社団法人キリスト教学校教育同盟関西地区協議会常置委員
会委員 (現在に至る)
2016 (H28) 年 4 月 一般社団法人キリスト教学校教育同盟理事 (現在に至る)
2016 (H28) 年 4 月 一般社団法人キリスト教学校教育同盟常任理事 (現在に至る)
2016 (H28) 年 4 月 一般社団法人キリスト教学校教育同盟関西地区協議会代表理事
(現在に至る)
2016 (H28) 年 4 月 千川興産株式会社取締役 (現在に至る)

主題講演「聖書に聴く」

『キリスト教学校のプレゼンス』

学校法人関西学院院長 田淵 結

おはようございます。今日は、私のような者を、この歴史ある東北学院大学の修養会にお招きを頂きましてありがとうございました。田淵 結（たぶち むすび）と申します。先ほども松本学長先生からのご紹介のなかで、先日のアメリカンフットボールの出来事からあえて「かんさいがくいん」という言い方もされましたが、私の名前もなかなか「むすび」と呼んでいただけませんので、あえてひらがなもつけさせていただきました。

よく関西でも「なんで私が●●大学に」（●●は有名大学校名）というポスターを目にいたします。残念ながらそこに「関西学院大学」とは書いて頂けないのですが、それをもじって言いますと、今日「なんで私が東北学院大学に」という気持ちを強く持っております。松本先生からの私のご紹介のなかで「著書がない」ということも話されましたが、私はそれほど広く学外の皆様に知って頂けるような著述業績もなく、どちらかというと学内向きの人間ですので、どこで私のことをお知りいただけたんだろうかという思いを強くしております。

もうひとつ、私自身のクリスチャンとしての姿勢は、東北学院大学のイメージとはかなり異なっているようにも思われるのです。昨日、せっかく仙台にお招きをいただきましたので朝いちばんの飛行機でまいりまして、広瀬河畔教会の礼拝に出席をさせていただき、懐かしく倉松先生とお目にかかれました。かつて学院におられた倉松先生、土戸先生、浅見先生などの方々のお働きを拝見しながら、「東北学院大学のキリスト教はこうなんだろうな」という思いを抱かされておりました。厳格で、学究的であり、固い、というところでしょうか。私が日本基督教団の正教師試験を受験しました際の面接は浅見先生がつとめてくださいました。その面接で「君はもっと勉強なさい」と指摘され、非常に恐縮した思い出もあります。つまり私自身のクリスチャンとしてのあり方には、それとは対照的な、関西風の「ええかげんさ」があるのです。

私は父が牧師、母方の祖父。祖母も牧師という、牧師としての三代目となります。父も祖父もみな明治生まれですので、信仰生活においてはとても厳格でした。「聖日厳守」をはじめとして「厳」という字であらわされるようでした。そんななかで育った私は、子どものころ、非常にうぶというか、日本中の人はみな教会に行っているんだと思い込んでおりました。

た。小学校に入るとなんと日曜日に運動会がある、そうするとみんな教会はどうするのかと本気で心配をしたのですが、そんな心配をしているのは私ぐらいということに初めて気づかされたのです。そうなる私も厳格な信仰生活を送っている家族に対して、少しずつ疑問も生まれます。神学部時代、西宮上ヶ原キャンパスの近くにある関西学院教会で神学生としての実習をさせていただいたころ、毎週日曜日の朝、西宮北口という乗り換え駅で、宝塚方面からの電車を降りて、楽しそうに大阪や神戸に遊びに出かけていくたくさんの人たちとすれ違います。内心どこかでうらやましさを感じつつも、「喜びをいできて主に仕え」と自分に言い聞かせながら教会に通っていましたが、まさにその内心の思い、なぜそんなに真面目に厳しく、教会生活をしているのか、ということもやはり感じてしまうわけです。

そんなところから、私自身「三代目はなんとやら」というか、関西風のええかげんさというか、そんな性格もどこかで身につけていったのではなかったでしょうか。だからなぜそんな私が「なぜ東北学院に」という思いを持つてしまうのです。

そういう私が今日皆さんにお話しをさせていただきたいことは、さきほどの松本先生のお話の中で、先生も来年3月でご退任と伺いましたが、私も来年3月末で関西学院を退職いたします。宗教主事、専任教員として1981年以来38年間お世話になったのですが、それよりもずっと前の1969年に関西学院大学文学部一年生として入学してちょうど満50年で学院を離れるということもあり、これまでの関西学院とのかかわりのなかで、特にキリスト教への理解、聖書の読み方がどうであったかということをお話できればと思います。ですから、専門家の方々からすると「なんだ、それは!」、「それは違う」「そんなふうでいいのか」というところもあるかもしれませんが。

関西学院大学の各学部に一名ずつ宗教主事が置かれております。その職務は全員必修のキリスト教学（4単位）の講義と学部によって週数回開かれますチャペルアワー（一限目と二限目の間の30分間）の担当責任がございます。キリスト教学においては、関西学院大学に入学して初めて聖書を手にする学生たちにキリスト教を語ります。ですので、私の専門である旧約学などを語るわけにはいかず、そんなことをしても全く通じない。まず聖書の開き方から、前の部分は旧約で後ろは新約、各ページの見出しの数字は章で本文中の小さな数字は節、その組み合わせで読みたい箇所を見つけます、などというところから始めます。ところがそうすると、関西学院の併設校である高等部やその他のキリスト教学校から進学してきた学生たちからは不平が出る。でもそれをやらないと一般の学生はわからない、という教室の状況です。でもそんな状況のなかで改めて聖書を読みなおすという体験は、それまで私が教会や神学部で親しんできた、それで分かったと思ってきたものではない読み方がある、ということに気づかされるのです。初めて聖書に触れる学生たちの素朴な疑問、驚き、批判、疑いなどが、とても重要で、聖書はそのことにちゃんと答えているということも発見させられるのです。

そこでみなさんにクイズをお出ししたいのですが、はやくも「馬鹿にするな」とお叱りを

受けるかもしれませんね。

授業でもかなり早い時期に「エデンの園」のお話をいたします。そこでアダムとエバ（物語の最初では彼女にはまだ名前がありませんが）が最初に口にする果物はなんだったでしょうか。これは旧約をよくご存じの方以外には「ひっかけ問題」で、リンゴではありません。「善悪の知識の木の実」です。今日は正解をされても、賞品となるおみやげも用意しておりませんのであしからず。で、第二問です、アダムとエバがエデンの園から追放されたとき、ふたりはどんな格好をしていたでしょうか。こちらは三択でお答えください。1. 何も身につけていなかった、2. イチジクの葉を腰に巻いていた、3. 皮のコートを着ていた。この問題は学生諸君からの指摘で私も考えさせられたのです。レジュメに一枚の有名な絵を参考に紹介しておりますが、それによると正解は2のようです。ところが本当は3なのです。私も「えっ！」と思わされた発見でした。この絵の作者も私もちゃんと聖書を読んでいなかった。彼らはラテン語の聖書を読んでいたのでこう理解したのでもありません。ラテン語のウルガータ聖書を読んでも答えは3なのです。創世記3章の21節ですが「主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。」という個所を、学生たちは指摘してくれるのです。私たちはこの物語は神様に背いた罪深い人間が、エデンの園から追い出される、そのとき挿絵にあるようにイチジクの葉だけしかまとうものもない姿で悲しみながら追放される物語という読み方しかできなくなっているのかもしれない。

ところが学生諸君のなかには教室で熟睡している学生ばかりではなく、熱心に聖書を読んで、ときには教師にいちゃもんをつけてやり込めようとする向きもある。そして「先生、それは違います、聖書にはこう書いてありますよ」という指摘を受けて私は「えっ！」となるわけです。私は、かつては授業のための準備をしっかりと、資料をいっぱい用意して教室に入ったのですが、だんだんにそうではなく学生たちが、聖書をどう読んでいるのか、どう受け止めているのかを聞きとるところで考えるようになりました。私が関西学院大学文学部で教えていた当時のキリスト教学の教室には300名ぐらいがおりましたから、そんな風に食いついてくる学生さんは限られています。また非常に熱心に教会にも通っている人もいます。彼女はいつも一番前に座って授業を聞いてくれたのですが、あるときずっと席を立って教室から出て行こうとしました。どうして？と尋ねると、「これまでも先生の話はおかしい、自分が教会で聞いてきたものとは違うと思ったので、教会の牧師先生に相談したら、そんな話は聞かなくてもいいのでは、と言われた」というのです。ところが彼女が3年生になってなんと私の専門のゼミに入ってきたのです。それをどうとらえるべきでしょうか。教室にはいろんな思いを持った学生さんがいます。そのひとりひとりの思いを聞いていると、確かに聖書は教会の正典であり、教会の教えの基本ではあるけれど、彼ら彼女たちにいろんな発見を与えているし、そこで何かを気づかされていることも多いのです。決して2千年前の物語ではなく、今の学生諸君にも多くのことを問いかけていますし、そこから私は様々なことを教えられてきたのです。

そうやって関西学院大学の教員としては28年間を文学部で過ごしました。そして2009年にお隣の聖和大学の法人合併によって、聖和キャンパスに関西学院大学教育学部が開設され、私はそこの宗教主事として移籍をいたしました。幼稚園教諭、保育士、小学校教諭、さらに中高の教員免許の取得を目指す学生さんたちとの新しい出会いがありました。そこでもキリスト教学を教え、エデンの園の物語を考えると、またも新しい経験がありました。この物語をキリスト教は伝統的に人間の原罪について触れているというような話をすると、学生たちは（教育学部は文学部の半数ぐらいの人数ですので、学生さんからの指摘はもっと厳しくなります）、「神様はずるい」「ひどい」と突っ込んできます。なぜ？と問い返すと、「神様は人間を作っておいて、その作った人間を試す。この木を園の中央に置いて、いかにもおいしいそうな木の実を实らせて、誘惑しながら、食べたらダメ！という。それが神様なのか？」ある学生がイラストを描いてくれました。エデンの園に木が生えていて、そこに「取るな！」看板が立っている。それならまだ注意もするだろう、ということです。ところが実際にアダムたちが実を取って食べようとするときには黙ってみていて、あとになって「取って食べたのか？」と出てくる、なんていやらしい（意地悪）なんだろう。ということですよね。きつとバイクの運転をしていて、一旦停止違反で捕まった学生たちが警官に、そこで見ていたのなら先に注意してよ、という経験を思い出したのでしょうか。

ところがその点も含めて、教育学部の学生たちと改めてこの物語全体を読んでいくと、彼はとても面白く、共感をしてくれるのです。つまりここに出てくる神様、アダムとエバ、いったいそれらは誰なのか、ということを考えるのです。

アダムたちは最初神様から「食べてはいけない」と言われると、きちんと言われたことにしたがって生活をしていたのです。すぐには取らなかつたのです。ところがあるとき蛇がでてきて、蛇は賢くいろんなことを知っているのので、本当に神様はそんな命令をしたのかと尋ねます。その質問からアダムたちは神様の命令に対して疑問を持ち、やっぱり死んでしまうのだろうかと思い始めるのです。そこで改めてその木を見、自分たちで考え、判断して木の実を口にします。すると神様は「お前たちは取ったのか？」と彼らを叱り、彼らはエデンの園をあとにする。教育学部の学生たちはそれをどう読んだのでしょうか。

ある学生が「先生、これは子どもの成長のお話ですか」と指摘してくれました。子どもにとって最初親は絶対の存在です。その考え方、価値観は親のものをそのまま受け止め、親の期待通りに成長してゆきます。ところが蛇が出てくる。つまり子どもたちにとって今までとは違った考え方、価値観をもった存在と出会うのです。親の言うままに生きている自分たちの生き方がゆさぶられるのですね。つまり学生たちが子どもの成長について学ぶ中で「社会化」という経験するという学びと、この物語が重なり合ってくるわけです。

私は関西学院大学に就任する前3年間は、日本基督教団神戸丸山教会の牧師をし、その付属の丸山小羊幼稚園の園長を仰せつかりました。あるときに3歳児のお母さんが訪ねてこられて「お宅の幼稚園に通わせるようになって、うちの子はいうことを聞かなくなった。言葉

づかいかも悪くなった。いったいどんな教育をしているのか」と責められたことがありました。まさにそれなのです。これまでお父さんお母さんの世界だけで生きてきた子どもたちが、別の家庭（世界）からの子どもたちと出会い、新しい価値観に触れる、ときにはそれがカッコよく見えてくると、そんな言葉や振る舞いをする。子どもたちが少しずつ社会で生き始めるのですが、ご両親にとってそれはなかなか理解できないのでしょうか。

その幼稚園の前に押しボタン式の信号があり、園ではいつも道路を渡るときはそのボタンを押して、青になってから道路を渡りましょう、と指導をしていました。ところがあるとき、お迎えに来られたお母さんが急いでおられたのでしょうか、子どもの手をとって、その信号の押しボタンも押さずに、車の来ないタイミングで道路を渡ろうとされたのです。思わず子どもが「おかあちゃん、ボタンをおしてからでないと渡ったらあかん！」と叫ぶと、「忙しい時はいいのよ！」とそのお母さんが答えたのです。実は子どもの価値観の変化、この場合は混乱の原因も、ご両親にもあるのです。

アダムとエバは結局木の実を口にしたために、これからは自分の生活を自分で支えるように「苦しんで子を産」み（3章 16 節）、「顔に汗をしてパンを得る」（19 節）と宣告されます。非常に厳しい罰のような言葉に聞こえますが、それは自立し、自由を得たものが負うべき責任を自分で果たすことをそういう形でしめすのです。

これも教育学部的なお話ですが、日本の子どもたちがどれだけ早く大人になりたいか、という調査があり、欧米との比較もされています。それによりますと日本の子どもたちは、あまり早く大人にはなりたくない、むしろ親のもとで過ごすことを望む率が高いということです。それは自立し、自由になってから自分が負うべき責任、負担、役割の重さにどこかで気づいており、大人の生き方の厳しさを感じているからともいわれます。エーリッヒ・フロムではありませんが「自由からの逃走」、自由になることに対する責任の回避という傾向が感じられ、むしろ誰かに依存することの安逸さを求めるのでしょうか。出エジプト記で、エジプトを脱出したイスラエルの民が、解放された喜びもつかのま「エジプトの肉鍋」、奴隷生活のなかで毎日きちんと食事が与えられてきた生活を懐かしんで、指導者モーセを批判する、ということが起こっているのです。

でもこの創世記において神様は、今エデンの園を出ていこうとするアダムたちに「皮の衣」を作って着せられるという言葉は、私も娘が自立していくのを見守ってきた親のひとりとしては、「神様、やさしいやん」「ええ神様やん」と思われるのです。

エデンの園の物語は、確かに原罪の物語であるし、それによってキリスト教の古典的な教義が形作られてきており、神の意志に従えない人間の弱さからによる「失樂園」が大きなテーマとされています。その反面、学生たちがこの物語を鋭く読み解いてくれるのは、私たち人間にとって「成長する」とはどういうことなのか、私たちは「自立」を本当に求めているのだろうか、という自分自身の現在と重ね合わせているのかもしれませんが、それに気づかされるのは教師としてとても大きな収穫でした。私自身が聖書の教師であるということが、

ある「思い上がり」（というのはややきつい言い方ですが）でしかなく、むしろ聖書のテキストは「すべての人に開かれて」おり、さまざまな課題を示し、その答えを導き出すための大きな手掛かりを与えてくれているのです。

お話がだんだん長くなりますが、授業ではさらに創世記の続き、カインとアベルの物語を読んでいます。よくご存じのようにこの物語では神様が、兄のカインに対して弟のアベルをえこひいきします（と学生たちは読みます）。この物語も教育学部的にはいいものではありません。つまり教育のひとつの大きな課題は、どう子どもたちを評価するか、ですから。学生たちにとって、やはりフェアな評価というのは一番の関心事です。彼らなりに努力をしていたのに、それも無視して「おまえはあかん」（関西弁の響きはきついですね）、「もっとちゃんとせえ」などと一方的に言われると、学生たちもその教師をそんな奴だと評価します。文学部時代の一人の学生のことが思い出されますが、朝早く私の研究室に来て「先生、寝かせてくれ」と言います。「お前、朝帰りで遊んできたんとちゃうか。もっとちゃんとしろ」ということをつい口にしてしまったのですが、後で話を聞くと彼は学費を自分で工面するために徹夜のバイトをしていたのです。彼は高等部からの進学者で家庭的には裕福だと思っていたのですが、父親が文学部への進学に反対して、それなら自分で行け、ということになったようです。私も思い込みでその学生を評価してしまったのです。彼はまさに自立した学生生活を送っていたのですね。そのこともあったのでしょうか、彼は卒業後ある大手企業に就職をしますが、改めて献身を志して同志社の神学部で学んで教職となり現在同志社のある高校で聖書を教えています。彼が関西学院大学神学部に来なかったのは私の責任かもしれませんが。

教育学部の学生たちにとって、カインの捧げものを拒否する神様は理解できないし、そのことで逆恨みをしてアベルが殺されるときに神様にも納得できないのです。今まさにカインが一撃を加えようとするときに、神様は何もしない。そして殺されたあとで「アベルはどこにいるのか」と訪ねてくる。なぜ止めなかったのか、一人の命が救われたのに。さらにそれから神様はカインを保護する。この物語は「わけのわからんことおびたしい」。でもここからは教師としての私の旧約聖書についての講義が本格的に始まるのです。

創世記は旧約聖書に含まれる39の文書の最初です（こんな言い方はキリスト教学的ですが）。エデンの園のお話、カインとアベルのお話、それはそれ以後に続く旧約の歴史に描かれる人間の営みの物語全体の前置きになっているのです。

創世記第一章の6日間での世界の創造物語、これも学生諸君からすれば突っ込みどころ満載の物語です。ではこれは単なる神話・おとぎ話なのか、むしろ君たちはこの物語に支配されて生活しているんだよ、と話します。「そんなことはない」「なんで」「私は聖書なんか読んだことないし、何の影響も受けてない」「キリスト教なんてしらん」と反論の嵐ですが、そのなかで、「では君たちはなぜ一週間に一日休むのか、その習慣はどこから来たのか」と彼らに問い直すのです。

今年明治150年と言われますが、明治以前日本には七曜制はありません。日曜日という

感覚ありません。しかし明治以後「脱亜入欧」のかけ声のなかで一生懸命西欧化にまい進し、そこでキリスト教の文化がドーンと日本を圧倒する形で入ってきました。日本は植民地にならなかったといわれますが、実は精神的・文化的は植民地化されたのではと私は思っています。国公立のお役所や学校が積極的に日曜日に休業します。公務員の方々に日曜日をお休みする根拠はなんですか、みなさんは聖書・キリスト教の教えにしたがって行政をすすめておられるのですか、と聞いてみたくもなります。この創世記の物語を神話だとして否定するのなら、一週間一日を休むカレンダーを廃止して、国公立学校は毎日授業をしなさい、それ以上に私は国公立の学生にもっと勉強しろ！と言いたいところもあるのです（やや言葉が過ぎました）。

この創世記一章の物語で造られたものは世界の秩序です。「夕があり、朝がある」一日が区切られ、一か月が区切られ、一年が区切られ、時間の秩序が整います。水、土、草、木、動物、鳥、人間という順番で創造される世界は、前者を前提として後者が作られている依存関係を示します。そのなかで私たちは明日を期待し、生活の基盤を確かなものとし、計画的に生きられるのです。しかし人間がその秩序を破壊するとき、大洪水が起こるのです。当時から自然破壊は繰り返されていたのですね。

しかし秩序に従うということは安定はしているが、変化や刺激は少ない。そこで神様の造った秩序（命令）に人間は従うよりも、自分での選択、意思決定をする。そして新しい生き方を選択しながら、神様の秩序とのかかわりをつけながら生きることになる。なぜ神様はアベルをひいきしたのか。彼が肥えた捧げものを持ってきたからでしょうか。でも神様は贈り物で人を区別したのではないのです。むしろ創世記からはじまり列王記（歴代誌）にまでいたるイスラエル民族の歴史全体を通してみると、その歴史のなかでカイン君（農耕文明）がアベル君（小家畜飼育者＝ベドウィンの文明）を圧倒していくことがわかります。イスラエル人はもともと羊飼いととしての移住者でした（そのことをマックス・ウェーバーは「小家畜飼育者」と呼びました）。彼らは移住生活の中で新しい牧草地を求め、水を得ながら転々と生活の場所を変えていきます。しかしやがて彼らも、カナン（今のパレスチナ）の農耕文明に触れ、今までの自分たちのあり方からそちらへと移って行ってしまうのです。移住生活は不安定で厳しく、質素です。クリスマスの夜野宿しながら羊の群れの番をし、いなくなった一匹の羊を探し求める羊飼いの生活、それは決して楽ではありませんでした。しかし定住生活をし、農耕を営むことで、一粒の麦から何百倍もの収穫が約束されます。そうすると羊飼いたちには比べるまでもなく農耕生活が好ましく思えるのです。

先ほどの松本先生の地中海でのご経験のなかに、そこに歴史的遺品が残されているということがございましたが、もし古代人がみんな移住者であったらそのような遺品はあまり残らなかったでしょう。それが残せるのは、一か所に定住して農耕生活に裏付けられた豊かな生活をした人々の存在があるからです。そして移住者と定住者では、その生活様式によって大きな価値観の差がうまれます。これもフロムの『生きるということ』という書物から教えら

れることですが、その原題は“To have or To Be”です。みなさんが初めて中学校で英語を習われたとき、Have 動詞からはじまりましたか、Be 動詞からでしたでしょうか。私は Have 動詞で、おそらく高度経済成長のなかで「持つこと」への関心が高まった時代だったからでしょうか。人間は多くの物を持つこと (To Have) によって生活が豊かになる、というのがカイン君が得た価値観でした。ところがアベル君はたくさんのもを持つことは、移動のときに邪魔になりますから何も持ちません。そこで大事なのはその人のあり方 (To Be) なのです。どんな倫理観を持ち、生き方をするかです。結局イスラエルは To Have を選び、カナンの地に国土を獲得し (ヨシュア記、士師記) てやがて王国を建て (サムエル記、列王記)、「栄華を極めたソロモン」と言われるまでに物質的に大発展するのです。しかしそこに新たな問題、私たちも現代直面している問題、持つ人と持たない人の差が生まれます。財産を持つ、権力を持つ、という生き方は徹底して身分社会・身分格差を生じさせ、持つ人が持たない人を支配する構造が確立します。最初羊飼いとして To Be 的に、それぞれの個性を発揮しながら平等に生きていたはずのイスラエル社会が、そうになってしまうのです。

私の専門的な旧約学の大きなテーマは、サムエル記上 8 章のある記述に言い表されています。サムエルはいわばイスラエルの旧体制を代表する指導者でしたが、彼の指導力では直面する国家の危機、ペリシテ人 (パレスチナ人) の侵攻に耐えられない。ここにパレスチナ問題の原型「カナンの地は誰の土地なのか」が記されているのです。その問題を現代の視点だけで解決するのは全く無理でしょう。サムエルはイスラエル 12 部族の対等性を重視して、みんなで話し合っって危機を克服しようとしています。すでに士師記 5 章のデボラの歌にもあるように、部族が対等だからこそ、参戦するかどうかはその部族の主体性にかかっています。「僕は行かない」という部族があれば、全体の結束は乱れます。私は「みんなが平等」であることはとても大事で、守っていききたいと思う立場ですが、ただしそのためには「みんな」が納得するまで議論をし全体のコンセンサスを取りつけなければなりません。時間と労力がかかります。でも戦争のような状態ではそんなことはやっておれません。ペリシテ人の脅威が迫っており、事実、サムエル記ではイスラエルは破れ「神の箱」も奪われてしまいます。

そんな状況でのサムエルの考え方は古すぎるといって、イスラエルの長老たちは「ほかのすべての国々のように」(サム上 8 : 5) 王を立てることをサムエルに要求し、それを実行させます。イスラエルには全く異質であった他の国の政治システムが導入されていくわけです。そこで立てられたサウル、その後継者ダビデ、ソロモンと王制は安定し、ペリシテ人は打破され、王国が発展するのです。

このソロモンの時代にエルサレムに神殿が建てられます。私はまだイスラエルに行ったことがないのですが、ある時恩師から「君はキリスト教を教えながらバチカンにも行かず、旧約をやりながらエルサレムも知らない」と鋭く指摘されたことがあります。「いっぺんちゃんと見てこい！」ということですが、まだそれは果たしてはおりません。

その神殿ですが、今ではその存在はユダヤ教においてもその遺構が「嘆きの壁」として重

要な意味を持っておりませんが、でもこれ、その建物のデザインというかモデルは何なのでしょう？ 羊飼いの言うようにテントのような礼拝所を作り、そこで犠牲も捧げていたようです。でも石造りの高層の建物、というのは実はイスラエル本来の伝統中にはなかったのです。列王記の記事のなかに、アハズという王様がダマスコで見た祭壇の見取り図と説明書をエルサレムに送り、エルサレムの祭司ウリヤがその通りに祭壇を築いたという物語があります(王下 17 章 10 節以下)。つまり定住生活をし、価値観も大きく変わっていく中で、宗教的にもカナンの上着の影響を受けて変質していったのです。羊飼いの時代には考えられなかった壮麗な神殿が、王の権威と権力を披瀝しながら国家を統合していったのでしょう。

ではイスラエル本来の宗教性はまったく失われてしまったのか、というとそこに登場する預言者たちの活動のなかに、To Be 的宗教性が継承されていることを見るのです。例えば預言者エレミヤは、神殿に向かって「主の神殿というむなしい言葉により頼んではならない」(エレミヤ 7 : 4) と訴えます。その点で旧約の預言者のメッセージは一貫しています。徹底的に王国を批判し、対立し、そのような政治制度が立ち行かないことを語るのです。そして預言者たちの言葉は成就し、イスラエル王国は滅びるのです。イスラエルの人々は亡国の民、ディアスポラとして世界各地に散らされてゆくのです。まさにアベル君を殺したカイン君は「地上をさまよ」う(創世記 4 : 12) ことになったのです。ではそこで彼らがいかに自分たちの民族性を維持するのか、そこに宗教的なアイデンティティの認識、つまり「カインのしるし」が強く意識されるのでしょうか。

さて、私のキリスト教学講義から旧約のお話をし続けているうちに、私に与えられた時間は残り 10 分となってしまいました。そしてまだ、今日のお話の題目としました「キリスト教学校のプレゼンス」ということについて何もお話しをしておりません。今までのお話がそれとどこでつながるのか、とご注意が聞こえてきそうです。

さて、お手元のレジュメには関西学院のことをいろいろ書かせていただいておりますが、そのことをゆっくりお話しできないかもしれませんが、それは本務校のメンバーに話すことにして、基本的なところだけに触れますと、東北学院をはじめとする日本の歴史あるキリスト教学校は、外国からの宣教師の先生たちによってスタートしています。正直申しまして私自身あまり御校のことを存じ上げませんので、間違っていると申し訳ないのですが、それぞれの学校を創られた宣教師の先生は明確なミッションをお持ちだったはずで、関西学院の場合を少しお話しますと、創立者ランバスたちは「キリスト教の主義 (principles of Christianity) を建学の理念とする教育を目指しました。ところが創立の年 1889 (明治 22) 年は、大日本帝国憲法が公布された年であり、その翌年には教育勅語が出されています。最近、大阪のある学校法人の幼稚園が園児たちに教育勅語を覚えさせ、またその精神で小学校をつくろうとして、政治家たちの関与も騒がれて結局中断するという事件がありました。その理事長さんは大阪では話題のひとつなのですが。

その教育勅語、ときどき「いいことも書いてある」と肯定的に評価する意見も聞かれます。

私は教育学部で教えておりますので、学生たちとこれを読みます。私は日本の学校教育の基本はここにあるのだらうと思っておりますので、知っておかないといけないと感じています。ただしそのときに、これを現代文（口語文）で読むことには注意が必要です。ちゃんともとの明治 23 年の文章でまずはお読みください。熱心に教育勅語をアピールされている団体の口語文訳ではきれいに書き換えられてしまっている部分があります。何が問題かという、大日本帝国憲法は天皇を中心として帝国民はすべてその臣民（家臣、サブジェクト）だいう関係を明確に規定し、そこで教育勅語は日本の（学校）教育はそのよき臣民を育てるためだということを主張します。天皇によりよくお仕えできる若者を育てることが教育だ、ということでそのキーワードは「臣民」なのですが、現代文に翻訳される時それが「国民」と書き換えられてしまっているのです。それは本来の勅語の精神を反映していない。さて帝国憲法が公布されてから 10 年後、1899 年に文部省は訓令第十二号を発令しますが、これは日本のキリスト教主義学校にとっては忘れられてはならない問題を引き起こします。その訓令は事実上の宗教教育禁止令で、文部省認定学校においては「課外といえども一切の宗教教育」がゆるされないというものでした。神の前の平等とか平和とか、そのような教育方針は明治政府の進める国策にはふさわしくないのです。言い方を変えれば日本政府は当時のキリスト教学校に対して、お前たちは本当に日本の学校になりたいのか、それともキリスト教布教団体にとどまるのかを問うたのです。初期の宣教師の先生方が抱かれたミッションは、まだ帝国憲法などもなく文部省などは無関係で、日本人の要請よりも宣教本部、教会、クリスチャンとしての自らのビジョンの実現で、もともと日本の社会、教育制度を考慮することは少なかったのです。ところがいったん憲法が定められると、その体制のなかでの学校運営を強制させるようになってしまった。そのことに対して、関西学院の場合、第二代院長の吉岡美国（よしくに）は「聖書と礼拝なくして関西学院なし」と大胆に宣言しました。その結果関西学院は認定学校になりませんでしたから、文部省が認める様々な特権、兵役免除とか上級学校進学資格など、今でいえば補助金交付などの公的支援なども一切ない、すべては自分たちで賄うということになってしまいます。それは学生募集にとっては致命的な問題となりますが、これは今も私たちには切実な課題です。結局関西学院は創立 20 年にして経営に行き詰まり廃校の危機を迎えることとなります。「聖書と礼拝なくして」という吉岡の姿勢は、私自身先輩院長の姿勢としては非常に尊敬しますし、その通りだと思わされる反面、それで学校が立ち行かなくなるという状況にどう責任が取れるのかも厳しく問われます。そこでそれまでのアメリカの南メソジスト教会による経営に、1910 年にカナダのメソジスト教会が参画し、よりリベラルといえますか現実的な方針を打ち出します。つまり文部省の方針にしたがって学校を改組し、その結果一旦廃校の危機にまで至った学校が、その後 20 年で大学を設置するまでに発展をいたしました。では創立者たちの思い・本来の建学の理念はどうなったのか、それに対する国策としての教育行政・訓令との関係はどうか、さまざまな問題が実は未消化のままであったことも否めません。

少し話題は変わりますが、私たちは日本国憲法で国民主権による民主国家が成立したと考えがちですが、少し関西人のつっこみとしての議論をしますし、ではなぜ「大臣」が「新」憲法に規定されているのでしょうか。大臣、つまり“グレートサブジェクト”というのは、誰に対する「臣下」なのでしょう。国民に対してはサーバントであってもサブジェクトではないでしょう。そこが曖昧なのです。さらに私たちが手にするパスポートの表紙のデザイン、厳密には違うそうですがそれは「菊の御紋章」、今も日本は立憲君主国のだというイメージが伝わります。戦後民主主義でも、天皇と国民の関係は未整理のままです。学校教育において学校主体か国家主導かという問題もまた同じで、私が教育勅語は今も日本の学校教育に影響を持っていると考えるのはそのあたりの問題です。まして大正期における関西学院では、学校主体などの教育は非常に困難であった。私は院長としては「聖書と礼拝なくして・・・」と訴えたいのですが、理事長や学長のお立場からはどうなのでしょう。むしろ「学生なくして学校なし」ではないのか。そこで最初にお話した旧約のメッセージが私に響いてくるのです。キリスト教学校も、自らの独自性の主張だけでは立ち行かず「ほかの学校のような」制度を導入しなければ、ということです。それを妥協という言い方をするのはつらいのですが、そのしんどさは、関西学院は今もそれを担い続けております。

しかしそうではあるけれど、私は日本のキリスト教学校はとても面白い、と思っています。面白いというのは変ですが、それでも聖書を読み続けているということです。しかもそれを一方的解釈して学生たちに押し付けるのではなく、彼ら彼女たちの読み方のなかでそこからさまざまな課題や考え方を自分たちで気づいていくプログラムを持っている。確かに国家、文部省からはいろんな理念的なことも言われるのですが、それをそのままではなく、聖書的な視点で受け止めなおすとどうなるか、というようなクッションがやはりあるのです。最近のグローバル化という議論もさかんで、よく「国際競争力」を養うということが言われます。でもキリスト教学校だったら、その教育理念や歴史的背景からしてもそれは「国際協調力」であるべきだろう、日本が勝者になるよりも、共によりよい世界を作り出そうという発想になるでしょう。やはり神様の前に人々は平等であり、愛し合い助け合う私たちの生き方を語らざるを得ません。関西学院ではカナダ人宣教師で第四代院長となったベーツが Mastery for Service というモットーを訴えました。その生き方をどこまで私たちが語り続けることができるか、そこにこれからの私たちの使命があるようです。

もう時間が来てしまいましたので、本日、旧約のなかで詳しくお話ができなかった部分、とくに預言書については、ぜひ皆さままでお読みいただき、お考えくださればと思います。彼らは当時の王権体制を批判し続けました。先ほどの触れたエレミヤだけでなくエリヤ、イザヤ、アモス、ホセアなど、彼らの言葉を学生諸君と共に読むことは、とても刺激的です。その姿勢を通してまたキリスト教学校の存在の意味を強く感じさせられるのです。ありがとうございました。

【 朝 拝 】

讃美歌：讃美歌 21 第 357 番

聖 書：新約聖書 マルコによる福音書 第 5 章 35 節～ 43 節

説 教：『タリタ、クム 少女よ起きなさい』

讃美歌：讃美歌 21 第 24 番

司会 大学宗主任 阿久戸 義愛

〔新約聖書 マルコによる福音書 第 5 章 35 節～ 43 節〕

イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物少女に与えるようにと言われた。

『タリタ、クム 少女よ、起きなさい』

学校法人関西学院院長 田淵 結

おはようございます。昨日から本当にあたたかいおもてなしを頂き、皆様とともに時を過ごさせて頂き、改めてこの研修会にお招きを頂きましたことを感謝いたしております。いろんな方とお話をしておりますと、初めてお伺いしたのに、いろんなつながりがすでにあって、懐かしさというところとちょっと変かなと思いますが、そんな思いを持っております。

朝の礼拝ということでございますが、昨日から申し上げておりますように、私は一年生のキリスト教学を38年間担当しましたので、どうしても入門編の話がわりと得意です。その内容をさらに深めていただくことは、皆様にお任せしたいのです。

一年生の学生たちに、とにかく聖書を読みなさいというと、じゃあどこから読んでいいのか分からない。イエスについて考えたい、それなら福音書を読みなさい。ということですが、絶対に新約聖書の1ページから読んではいけない、カタカナばかりで途中でイヤになってしまうから、むしろ『マルコによる福音書』から読むと、とっかかりのよさというのがあるんじゃないか、とアドバイスします。するとイエスの生涯の骨組みがわかる、それがわかったら次にルカにいき、マタイにいき、最後にヨハネ福音書はどうだろうか、と思いますが、さてどこまで読んでくれるでしょうか。

今日はそのマルコ福音書をお読みいただいたのですが、マルコは新約の四つの福音書のなかで一番全体として短いのですが、今日の記事、実は皆様の聖書の見出しのところに「マタイなんか」「ルカなんか」と記されているように同じような記事を載せているマタイやルカに比べて一番長いのです。今日はその中の最後の部分だけを読んでもらいました。物語の始まりは21節からで、いろいろあって今日の個所に来るわけです。そのあらすじを簡単にご紹介しますと、イエスが歩いているところに、ユダヤ教の会堂（シナゴグ）の教師（ラビ）のお嬢さんの容態が悪いので、すぐに来てくれというのです。イエスに祈ってほしい、手を置いてほしい、というお願いですね。そこでイエスは出かけるのですが、途中で別の女性にあい、などいろいろあってラビのところへの到着が遅れます。するともうその少女は亡くなってしまっていて「もう来ていただかなくても」と告げられます。それに対してイエスは「いや、行こう、今からでも」と部屋に入り、その少女をイエスはよみがえらせる、というお話です。イエスは奇跡を起こす、少女をよみがえらせた、というストーリーはまたもや学生諸君から「そんなあほな」「あるわけないやん」というコメントが押し寄せます。この物語は三つの福音書が語ります。2000年にわたってその出来事が報告されてきたのです。

普通に「そんな馬鹿な」で終わらない、なぜそうなのか、というところを学生諸君も一緒に考えようとしてくれると、私はとてもうれしくなります。

ところでマルコによる福音書の最初に「イエス。キリストの福音のはじめ」という言葉があります。そうマルコはイエスの働きを福音という一言で示したのです。それを初めて聖書に触れる一年生の学生たちに伝えても、「福音??？」という顔をされるだけです。「またわからん言葉が出てきた」という。そこで私の神学生時代のギリシャ語の知識をひけらかしながら、それはギリシャ語でエウアンゲリオン、エヴァンゲリオンとなるんだよ、という少し「おや」という顔をしてくれる。彼らにとって福音という単語以上にエヴァンゲリオンという単語の方が耳になじんでいるのでしょう。しかしそれは学生たちのイメージのアニメチックなものではないので、その言葉の意味は「いろんな力と戦って勝利する、その喜びの知らせ」のことなんだ。という少し福音書などを読んでいた学生が、イエスは十字架で死刑にされるじゃないか、どこが勝利で、喜びなんだ。イエスは敗北者ではないのか、と話はどんどんふくらんでいくのですが、今日はそこまでお話はできません。

でも今日のお読みいただいたマルコの物語、これも確かにイエスの福音の出来事、彼の戦いの記録なのです。マルコでイエスはたくさんの病氣や障がいを持つ人を癒しますが、それは彼と悪霊との戦いでした。そしてこの少女をよみがえらせることも、また少女の命を奪っていく力との戦いの一つだったでしょう。しかし私は、それは決して悪霊だけではなく、もうひとつ別の力との戦いがそこにあったように思います。イエスがラビの家に着いたとき、すでに少女は亡くなっており、もうイエスの助けはいらない、というような言葉が伝えられます。イエスはそれを聞き入れず、彼女の病床というか Deathbed のそばに寄り添って、彼女は「眠っているだけだ」と語ります。すると人々はイエスを少し馬鹿にしたような態度を示します。「馬鹿なことをいうな」「死んだ者は死んだんだ」。そこでイエスは「タリタ、クム」とアラム語で少女に呼びかけます、「少女よ、起きなさい」と。聖書に通じておられる皆様は、そこで少女がよみがえること、つまり物語のオチを知っていますが、学生諸君はこの言葉はイエスの気休めにすぎない、そしてよみがえるなんて訳がわからん、となるのです。

そこにイエスの戦いがあるのです。そんなことをしても無駄だろう、なんて馬鹿なことを、と思い込んでいる私たちの、その決めつけとの戦いなのです。この物語の全体のなかで、イエスは、自分にかかわりたい、癒しを求めたいと切実に求めている人に向き合っているのです。そしてこの少女に、最後まで向き合おうとされるのです。あきらめないのです。

私は昨日から東北学院にお邪魔し、改めてキャンパスも見せていただきつつ、関西学院との大きな共通性に気づかされました。さきほど懐かしさという言葉を用いましたが、大きなつながりに気づかされたのです。キリスト教教育を展開する共学の4年制大学で、ということと同時に、もうひとつ強く感じたのは、ともに被災校だということです。大きな災害を被りつつ、そのなかから新たな教育の可能性を求め続けているということです。

1995年の阪神淡路大震災では、建物的な被害などはそれほど多くはありませんでしたが、

15名の学生諸君の命が失われました。私が所属しております文学部ではその半数7名が犠牲となりました。昨日創世記のお話をしましたが、その最初「地は混沌であって」、つまりカオスの状態であったのです。先週まで教室に出席していた一人の学生が授業の後「質問があります」、真近に迫った後期試験のための質問をしてくれたとき、「来週の授業で答えます」と答えたのですが、その来週は彼には訪れませんでした。私たちが当然のことと寄りかかっていた自然の秩序が崩れ落ちるとき、また私たちの予定や計画、約束なども空しいものになってしまうのです。東日本大震災での東北学院の皆様のご経験も私たちと共通するものがり、そして津波ということ、さらには福島原発ということなども言えばそれを超えるものがおありだったことでしょう。

その後関西学院で、東日本大震災を記念する企画のなかで『遺体』という映画を観ました。ご覧になられた方も多いと思いますが、津波に襲われた釜石の、遺体安置所での出来事です。映画ですから本当はもっと違ったものだったと思いますが、大変な混乱の中で人々が変わり、はてた家族と再会する傍ら、言葉は悪いのですがどんどん運び込まれてくる遺体の処置が行われます。やがてそんな騒然とした雰囲気を一変させる場面となります。あまり映画のネタバレをしては良くないのですが、釜石市の女性職員が「お線香をあげましょう」と、ほんとうに急ごしらえの祭壇を用意します。そこに一人の僧侶が現れて、リンを一打ちするので。そのチーンという音が、そこで初めて津波で亡くなられた人々に向き合うことの大切さに気付かされるのです。私はこの映画のこの場面が忘れられません。それまで犠牲者の対応に夢中になり我を忘れていた人たちが、自分たちが向き合うのはひとりひとり、大切なひとりだということを思い起こさせられるのです。災害が起こる、多くの犠牲者が出る、そのときどう対応するかというマニュアルもあるにはある、しかし現場は大混乱、どんどん作業を進めなければ、というときに一番大切なこと、それは亡くなられた方の残念さ、無念さを受け止めてその方に向き合い、その方に語り変えながらお見送りをする。というもっとも大事な瞬間を、現場の方々は過ごしておられるのです。

今日のマルコ福音書の記事のなかで、イエスが家に到着した時もそこは大混乱でした。「人々は大声で泣きわめいて」（38節）いたのです。人々はそのなかで自分たちが何をすべきかさえ見失っている。そのときイエスは、失われたこの少女の生、命、彼女の無念さ、もっと生きたかったというその思いになぜ向き合わないのかと。つまりイエスは、そのときに本当に大事なものへの視線を私から奪ってしまうその現実との戦いのなかで「タリタ、クム」と叫ばれたのでしょう。

東北学院においても、そして関西学院でも、震災を通してさまざまなことを学生諸君に語りかけてきました。そのとき私たちは誰に向かって語りかけているのでしょうか。その後輩たちに対してだけでしょうか。私も長い教員生活を通じて出会った学生諸君とさまざまなことで、思いがけなく地上でのお別れをしなければならぬ経験をしてきました。そのときに、彼らの命は決して私たちの目の前から失われてしまったのではない、彼ら彼女たちのこれか

らの生涯、その命の輝き、可能性、そしてどんな未来を展望していたのか、それをこれからも問いかけて続けることも忘れてはならないでしょう。私たちがキリスト教学校にかかわっているからこそ、そのことを見失ってはならないのです。

阪神淡路大震災ももう 25 年、四半世紀前のこととなってしまいました。今の学生諸君はまったく知りません。ちょうど私たちが学生の頃、太平洋戦争について語っておられた先生方に、「何古いことをいつまでも言っているんだ」と思った思いを、今の学生たちが私たちに抱くことでしょう。私たちは今、その先生と同じように自分の体験を通じて与えられた思いを語り続ける責任があるのです。あの震災で私たちの仲間の 15 人が亡くなったんだ、という事実、過去の記憶だけではなく、そのひとりひとりの希望、志し、夢、そのようなものを後輩たちがどう受け継げるのか、を共に考えることができるのです。

イエスが人々の混乱とあざけりの中で「タリタ、クム 少女よ起きなさい」と言われた。あなたの人生はそこで終わってしまったかのように見えても、決してそうではない。あなたの存在、それは神様の目から、そして私たちの思いから消え去ることはない。いつも私たちの思いの中にある、そのことを若い世代に、ひとりひとりの命の輝きと重さを、みなさんは東北の地で、私たちは関西で語り続ける働きを共にするお仲間であっていただきたいのです。

この少女はイエスの言葉によって起き上がりました。そのイエスの福音の力に秘められた現実を信じながら歩み続けたく思います。祈りましょう。

愛する神様、私たちがあなたからゆだねられておりますそれぞれの働き、そのことなかで私たちは多くの出会いがあり、別れを経験しております。そのひとつひとつの大切さ、かけがえのなさを、私たちに託された学生諸君一人ひとりの存在の大きさをしっかりと見つめながら、これからの教育と研究に取り組んでいくことができますように、あなたの導きと支えとをお祈りします。とくに今回の研修会を通して与えられた多くの学びと経験を感謝し、東北学院、関西学院があなたと共に歩み続ける学び舎であり、私たちの歩みをあなたが祝福してくださいますように。主のみ名によってお祈りいたします。アーメン。

全体懇談

『東北学院英学史年報』に見る東北学院の英学
—太平洋戦争終戦の前後期と新制大学初期およそ15年間の英学を中心に—

東北学院大学名誉教授 平河内健治

『東北学院英学史年報』に見る東北学院の英学

—太平洋戦争終戦の前後期と新制大学初期およそ15年間の英学を中心に—*

東北学院大学名誉教授 平河内健治

はじめに

皆さん、こんにちは。

第63回の東北学院大学教職員修養会でお話ができることを光栄に存じます。2014（平成26）年3月末に東北学院理事長を退任後は、大学土樋キャンパス南にある聖愛幼稚園で（この幼稚園は本年2018（平成30）年3月末で休園となりましたが）、園長として園児や保護者にお話しをする機会がありました。しかし、せいぜい多くて30人程度に5分ないし10分間のお話でしたので、今回はそれよりもかなり長い時間、また、多くの皆さんとお付き合いすることとなり、今は大変緊張をしているところです。久し振りに、私自身の母校でもあり、教鞭をとった旧職場でもある東北学院大学に奉職する皆様と共に大学教職員修養会に参加できることに心から感謝しております。お招きをいただき有難うございました。しかし、主催者側のご期待にお応えする自信はなく、他に適任者がいるのではと全く心もとない感じを持ちながらも、折角の学ぶ機会とお引き受けをし、準備を進めてまいりました。東北学院大学教職員として、皆さんにとっても何かを学び取る機会、そのための刺激となればと願っております。

5月初めの野村大学宗教部長からのご依頼は、佐々木哲夫院長のご推薦もあり、東北学院大学の英文科の草創期の様子をお話いただければとのご提案でした。「東北学院の150年史にも、記録として残せるので、文学部、英文科の進展について、資料や写真などを自由にお使い頂いて、歴史や思い出など語っていただけたら幸いです」とありました。

歴史家でもなく、文献学（フィロロジー）の専門家でもない私にとって、大変荷の重いことで人選を間違ったとしか思えないのですが、幸い東北学院英語英文学研究所が1980（昭和55）年より毎年1回発行している『東北学院英学史年報』という雑誌があります。今年度は第40号を発行する予定になっております。私自身も一時編集に携わった経験があります。そこで、そこに記された文献や報告に基づいて、東北学院の「英学」について考えてみることにいたしました。私自身は、第二次世界大戦終戦直後の1946（昭和21）年に小学校に入学し、1952（昭和27）年に東北学院中学校に入学、1959（昭和34）年に東北学院高校を卒業しております。その後東北学院大学文経学部英文学科に4年間在学し、1965（昭和40）年に国際基督教大学で修士号をとった直後に母校東北学院大学に助手として採用

されました。およそ 20 年間の教育期間中に、自分が英語という言葉にどのように接してきたかを簡単に私の人間形成期とっていい期間を振り返ることにし、そこを中心にお話をすることにいたしました。

東北学院大学は新制大学として、1949（昭和 24）年に発足しています。私自身は第 11 回卒業生となります。大学院文学研究科は私が学部終了後 1 年後の 1964（昭和 39）年 4 月に発足しています。私の話は、太平洋戦争終戦を経て新制大学文経学部英文学科が発足し、文学研究科英語英文学専攻が発足する直前までの話を中心となります。今から、55 年以上も前、半世紀以上も前を振り返ることになります。

まず、『東北学院英学史年報』の概要を述べ、次に、キリスト教学校にとって「英学」というものが何を意味するかを問い、続いて、大学英文学科草創期から 15 年間の「英学」を私の思い出を入れながら振り返り、最後に、英語教育教材のサンプルを三つばかり提示したいと思います。

なお、総務課からはパワーポイントのプロジェクターや資料の印刷などの援助協力の申し出はあったのですが、私自身の未熟な技術の制限から、印刷物だけの資料になったことをお赦しいただきたいと存じます。史的記述の都合上、人物の敬称は付けませんが、お赦し願いたいと思います。

1. 『東北学院英学史年報』

『東北学院英学史年報』の創刊号は 1980（昭和 55）年に発行されました。東北学院英学史編纂を目的とする資料収集を狙っての発行でした。編纂と年報発行の目的については、志子田光雄先生が第 6 号（1985、46 頁）編集後記の中で、次の（1）のように記しています。

- （1）東北学院が英語教育に果してきた貢献度はかなりのものであるに違いない。その跡付けをなさんとして英学史の編纂に取り組んで来た。一方において東北学院内部における英語あるいは英文学教育の特色を明らかにし、他方においては母校を巣立って各地に散開して教鞭をとり、あるいはとりつつある諸氏の実態を把握することにある。

この英学史編纂の試みのきっかけは、当時のシップル館（現在はデフォレスト館と呼ぶ）が研究室として使用されていた頃、お隣り同士で互いにパイプ煙草仲間であった史学科の加藤孝先生と志子田先生との間での四方山話の中での加藤先生の発案からだったとあります。この経緯を志子田先生は、第 20 号（1999、38 頁）の編集後記に次の（2）のように述べています。

- （2）この頃、同志社大学で英学史の編纂の試みを開始したという情報を得ていた加藤

先生が、「同志社と同じくらい長い歴史を持ち、劣らず優れた英語英文学方面で貢献して来た人材を輩出した東北学院の英学史も、今編纂に取り掛からなければ、永久に失われるものが多いのではないか」という、歴史家的な発想で力説された。学校のキャンパスを歩かれる山川丙三郎先生の姿を直接何度も目撃し、ゲルハート博士に直接教えられ、斎藤静教授の研究室の後に入って住人になった私としては、先輩の先生方を絶えず意識し、いずれ記録は残したいと考えていた矢先であったので、一も二もなく賛成して計画実現にとりかかったのであるが、簡単には賛成を得られず、ようやく昭和 51 年に調査開始の同意が得られ、実際に行動に移ったのはそれから 2 年半後である。

パイプ煙草の紫煙を^{くゆ}燻らせながらの母校愛に溢れる二人のキリスト者研究者の交わり、ないし学的交流からは、東北学院に先駆けて、同志社設立者の新島譲や当時の宣教師たちが創設に関与した宮城英学校（後に、東華学校と改称するが、東北学院開設の翌年に設立 5 年半で廃校）との設立に関する葛藤という^{たゆた}摂理の香り揺蕩う雰囲気^{まよ}が東北学院英学史編纂に関しても感じられます。¹⁾ 信仰や信念への誇りと僻みや嫉妬心が絡む東北人としての他校へのライバル意識というものが英学史編纂や年報発行の原動力になったことは否めないようでもあります。

創刊号から、2018（平成 30）年 3 月 31 日発行の第 39 号までに、私の調べた限りでは、執筆者や座談会参加者は延べにして 134 名で、実数は 86 名となっています。大半が同窓の東北学院教師や同窓生です。その内容は遠藤健一先生が第 30 号（2009、53 頁）の編集後記で次の（3）のように纏めています。東北学院創立 123 年を祝う時期です。

- （3）これまでの総記事をめくると、月浦利雄先生の英語教育関連記事に集約される東北学院中高等学校の戦前・戦中・戦後の英語教育、山川丙三郎先生や斎藤静先生の業績関連記事に象徴される東北学院専門部の英語教育・研究、ゲルハート先生ご一家をめぐる記事などに象徴される東北学院大学英文学科草創期の英語教育、さらには、英文学科卒業生による東北地方の中学・高等学校における英語教育への貢献、そして、大学院英語英文学専攻修了生による全国の大学における英語教育・研究への貢献等が、見て取れます。割かれている紙幅に長短はあるにしても、創立 123 年を迎えた東北学院が、草創期から、深く英語教育に関わってきたことを如実に物語る内容となっています。

元東北学院中高等学校の聖書科教諭で、『東北学院百年史』執筆編集委員の御一人として東北学院資料室に勤務し、東北学院大学講師（キリスト教学）も歴任された竹井一夫（ペンネーム、藤一也）先生は第 3 号（1982）から第 13 号（1992）まで毎年寄稿して下さっ

た合計 11 本の論文の大部分は、1886（明治 19）年創立の仙台神学校から始まる東北学院の沿革史の中での明治から大正時代の「東北学院草創期と興隆期の英学」について考察しています。遠藤健一先生の『東北学院英学史年報』の内容の纏めに追加できるとすれば、東北学院草創期と興隆期の英学を挙げるができるかもしれません。さらに、E S S、英語英文学研究会、英字新聞などでの「学生の課外活動としての英語学習」に関する報告をも挙げるすることができます。

この『東北学院英学史年報』はいずれ発行予定の英学史編纂の資料とするためでした。そのため、英語英文学研究所の事務局が財務部長や財務課長との次年度予算折衝では、いつ編纂史が完成予定か常に問われたとのことでした。しかし、毎年継続して 30 年間途絶えることなく第 30 号まで発行できると、自ずとその発行の意義も変化して来ます。『東北学院百年史』（1989）には見られない新たな資料の発掘という意義が生まれてきます。私見では、これに関し、ここ 10 年の間で特筆すべきことに二つあるように思われます。

一つは、この 30 号でよく知られるようになった東北学院英文科卒業生の日本の聾啞者教育への手話教育に果たした貢献についての資料研究です。その嚆矢となるのが高橋潔です。氏と旧制東北中学で同僚であった元 T G 史学同窓会長の遠山晋の 2003（平成 15）年の講演を当時史学同窓会幹事長の渡邊泰伸氏が「命を捧げし真の人―貴い生涯を盲・聾啞者のために捧げた人々の群像―前 T G 史学同窓会長遠山晋先生の講演記録から」と題して記録しています。遠藤健一先生は編集後記（54 頁）で次の（4）のように紹介します。

- （4）「命を捧げし真の人」は前 T G 史学同窓会長の故遠山晋先生の 5 年前の講演の内容を、現 T G 史学同窓会副会長の渡邊泰伸先生が再構成されたものです。内容は、日本の手話教育の確立に貢献した故高橋潔氏に関わるものです。高橋潔氏は東北学院専門部文科（東北学院同窓会名簿によれば、英文学科系に配置され、明治 30 年に第 1 回卒業生を出した文科専修部を明治 37 年に継承し、高等学部文科、専門部師範科、専門学校英文科、新制大学英文科へと継承される学科）の大正 2 年の卒業生です。高橋氏は、大阪市立聾啞学校を昭和 28 年に退職するまで、同校にて、教員として 38 年間、校長として 28 年間、聾啞者教育に尽力しました。とりわけ、聾啞者教育の現場における、口話―手話論争にあって、手話教育の重要性を説き、現在の手話教育の基礎を築いた一人とされています。この辺の専門的な知見については、清野茂氏の「昭和初期手話―口話論争に関する研究」（『市立名寄短期大学紀要』第 29 号、1997）に詳述されています。特筆すべきは、高橋氏を中心に、東北学院専門部文科の卒業生 5 名が、大阪市立聾啞学校に勤務し、手話教育の実践に携わったという事実です。そのひとり故大曾根源助氏は、昭和 4 年、アメリカ、カナダを視察し、当時支配的であった文部省主導の口話教育に対して、手話や指文字の有効性をあらためて確認して帰国したと、清野氏は論じています。讃美歌

の手話による歌唱指導、宗教的情操にまで及ぶ独自の大阪市立聾啞学校の教育方針などについては、まちがいなく東北学院の建学の精神が脈動しているように思われます。

次号の第31号(2010、1-39頁)には、元本学職員の櫻井祐子氏が明治後期から大正時代の卒業生の聾啞者教育の貢献についての詳細を執筆しています。ちなみに、『東北学院百年史』には、同窓生としての名はあっても、聾啞教育者としては、高橋潔や大曾根源助は登場していません。2017(平成29)年に河北新報出版センターから発行された『東北学院の歴史』の52ページに、初めて、高橋潔はこれら記録を基に「聾啞者の師父」として記述されています。従って、新たな東北学院英学史の掘り起こしの記録として貴重なものとなっています。

もう一つは、元東北学院専門学校英文科教授の山川丙三郎(明治30年文専卒/大正8年10月~昭和22年8月勤務)のダンテ研究を物心両面で支えたクリスチャンの大賀壽吉の御子孫から本学に寄贈頂いた「大賀壽吉宛山川丙三郎書簡」の翻刻の掲載が第37号(2016)以降継続されていることであります。書簡は、山川ダンテ研究の一次資料として極めて史料価値の高いものです。このために中央図書館では「山川ダンテ稀観本・山川書簡特別展」および「東北学院創立130周年プレ企画『ダンテと山川丙三郎』」が2015(平成27)年11月に開催されました。これらの事情は遠藤健一先生のこの第37号の編集後記(84頁)に記されています。これも『東北学院百年史』発行の時点では発見されていなかったものであります。

このように、『東北学院英学史年報』は纏まった東北学院英学史編纂の単なる資料収集の道具というよりも編纂の歩みを深化・改変し、この資料発掘と提示の動的な英学史編纂の過程そのものへと進化変貌しているように思われます。英学や英文学科の教育が継続される限り、この過程が継続されることが期待されています。

『東北学院英学史年報』発行初期に、初代院長押川方義の「東北をして日本のスコットランドたらしめよう」という標語との関連で「何故東北の地にある東北学院が英語中心のキリスト教教育をするようになったか？」が問われ回答が求められたことがあります。例えば、1979(昭和54)年カルダイ社発行の『ああ東北学院』(108頁)は「なぜ東北学院は英語に着目したかといったテーマについては、東北学院英語英文学研究所が編纂に着手している『東北学院英学史』が、何らかの答えを出すはずです」と期待をしております。そこにある仮説、すなわち、仮の答えは、1)日本語を通さないことによって、普遍に達する道と、2)中央のフィルターを通さずに国際社会に達する道の二つを探るためというもののよう思われます。

しかし、問いそのものは戦略的かつニュートン因果論的発想であり、必ずしも適切なものとは思われず、キリスト教と英語を通してのキリスト教的人間教育は日本人牧師押川とアメ

リカ人宣教師・教師ウイリアム・E・ホーイとデイヴィッド・D・シュネーダーとの出会いという摂理に始まり、答えとしての二つの仮説は、建学の精神の発揮によるその結果ないし成果なのであります。キリスト教の普遍的価値を英語という外国語を媒介として人間形成を目指し、キリスト教精神の自由の価値観から、中央の価値観から独立し、独自性を発揮できる人材を輩出したのは神の賜物であり摂理なのであります。「地の塩、世の光」の聖句や Life, Light, Love のモットーはこの神の摂理を指示しております。

2. 英学とは何か？

次に、そもそも英学とは何か、また、それは何のための学問として捉えられるのかを考察してみたいと思います。

日本英学史学会のホームページの「学会案内」を参考にしてみましましょう。日本英学史学会は1964（昭和39）年6月に「日本英学史研究会」という名称で発足し、その6年後の1970（昭和45）年10月に「日本英学史学会」となった学術団体であります。「日本英学史学会」は「英学」と「英学史」を次の（5）、（6）のように定義しその研究領域を説明しています。

- （5）幕末・明治期において、英米の書物や英米人などを通して行われた西洋学術の研究を「英学」と言います。「英学」がわが国の近代化に果たした役割はよく知られています。この「英学」と隣接する社会史、文化史などを背景としながら、史的に研究する学問を「英学史」と言います。研究領域を個別的に分類してみると、日米・日英交渉史、英米（西欧）文学、思想導入史（受容史）、英語教育史、学習史、英語教授法史、英語教育機関・学校史、近代科学史、英語関係書・辞書史（研究）、お雇い外国人研究など実に幅広い研究領域があります。
- （6）日本は幕末から明治にかけて「近代化」へと舵を切り替えました。日本はいわゆる西洋先進国の文化・文明・学術を、最初はオランダ語を通して、次に英語を通して受容してきました。十九世紀はイギリスの世紀であり、二十世紀はアメリカの世紀でありましたが、そこへインターネットの発明が加わって、今や英語は実質的には世界語であると見做す人が少なくありません。基本的に言いますと、英学史は英学が十九世紀に（明治が終わるまで、とする人もいます）日本に入ってきて、日本の近代化を促進させたという事実、さまざまな角度から歴史的にアプローチするものです。ひと口に英学といいますが、その内容は多岐にわたります。文学、言語、芸術、歴史、宗教、社会制度、教育、文化人類学、政治、経済、商法、科学技術、医学等、およそ文化・文明といわれるすべての分野を含むことができます。英語を媒介として日本にもたらされた限りにおいて、すべてを英学史の対象にすることができます。そういうわけで、学問としての英学史は、それがオー

ブな学問であることが最大の特色であるといえるのです。

ご承知の通り、日本の近代化は幕末から明治にかけての西欧文化の受容から始まりました。最初はオランダ語を通して、次に英語を通して行われました。蘭学と英学と称されました。漢学と呼ばれたそれ以前の中国からの学問と対立するものです。『東北学院の歴史』（9頁）には「押川にはキリスト教で日本を救いたい、ホーイには教育活動を通して信仰を日本に伝えたいという想いがあった」とあり、仙台神学校という私塾から始まった東北学院はキリスト教信仰を基に日本の近代化を教育の中で果たすことを目的にきてきていると捉えることができます。草創期のケルカー図書館としての英文洋書寄贈や英語神学部の設置などを振り返ると、東北学院の教育の原点が「英学」にあったと言えるかもしれません。「英語の東北学院」の伝統の出発点はここにあります。

東北学院創立者の一人のホーイの東北学院創立の翌年の1892（明治25）年開院式演説の中に、次の（7）、（8）、（9）、（10）のような表現があります。

- （7） Our educational principles are distinctively Christian. (私たちの建学の精神は紛うことなくキリスト教的です。)
- （8） But more than this broad and liberal culture, more than is included in every faculty, more than can be accomplished in merely traversing many fields of knowledge, we seek in every student *The Man*, the eternal thought that animates his being. Yea, we seek to develop that germ of innate truth which lies lodged in the human heart and comes to view in speech and action; the truth as it is embodied in the constitution of man. (しかし、このような広い一般教養知識以上に、また、学生がもつどの能力以上に、また、唯単に多くの領域の知識を交差させる以上に、私たちは、一人一人の学生のなかに、人間の本性、すなわち、人間を真に生きた者とする永遠の思想を求めるのです。そうです。私たちは人間の心に宿り、発話と行動として顕現する生得的真理という胚芽の発達を求めます。これは人間の心身に真に内在するものなのです。)
- （9） Let every student walk in righteousness and holiness. Let every student be true to Japan and to his beloved Emperor by being a man, and by being a man he will realize the perfection of his being in Jesus of Nazareth. (すべての学生が、義と聖のうちに歩みますように。すべての学生がこのような真の人間になることによって、日本国と敬愛する天皇に忠誠を尽くすことができますように。それによって、ナザレのイエスの中で、自分の在り方が完成するのを悟ることができるようになるのです。)
- （10） In the spirit and beauty of holiness they will serve their country as valiantly as any

Japanese, Roman, Greek, Englishman or American ever did. (聖なる魂と聖なる美に包まれ、学生は他の日本人やローマ人、ギリシャ人、英国人あるいは米国人がそうであったと同様に、勇敢に祖国に仕えることでしょう。)

演説では、建学の精神がキリスト教であることを(7)で宣言し、その後、科学、芸術、哲学などの知見獲得の喜びを学生に伝えることに関心を持つと同時に、それ以上の目標を(8)のように述べています。ここには生得的な人間成長の資質への信頼が見られます。(9)には、押川のキリスト教に基づく日本の救いと妥協が見られ、イエス・キリストを教育の理想の目標像とすることと日本の天皇への忠誠が矛盾しないことを述べています。そして、(10)においては、祖国に仕えることは、他の国民にも適用され、キリスト教的人間の理想像は普遍的な価値へと高められています。このように、キリスト教学校の東北学院では、キリスト教に基づく建学の精神の発揮がその近代化の幕開けであると捉えることができます。明治の東北学院草創期では、このための「英学」であったと言えます。

その後、建学の精神は(5)、(6)に定義されるような英米の書物や英米人などを通してのみ伝承されてきたとは必ずしも言えませんし、「英学」を幕末・明治期に限定する必然性も見当たりません。「英学」の一つである英語教育が東北学院の建学の精神に基づくこの近代化に果たした役割の重要さは看過できませんが、東北学院建学の精神の伝承が今も継続されている限り、東北学院の英米人との交わりや英語という言葉を通して行われる教育の時期的範囲を広げて考察する必要があります。ここでは、「英学」というものを「幕末・明治期以来、英米の書物や英米人の英語が日本の近代化に果たしてきている役割と貢献について考察する研究」を「英学」と呼ぶことにします。その歴史を扱う研究が「英学史」となります。

『東北学院英学史年報』は東北学院創立以来今日までの英語や英米人との学的教育的交わりにおける人間や学問の事情を考察して来ました。特に、建学の精神に基づく教育上また学問上の働きが顕著な宣教師やクリスチャン教師やそれら群像に感化された人物の働きなどを紹介しております。ここでは、「東北学院の英学」を、「東北学院キリスト教建学の精神の伝承が、英語や英米の書物や英米人との交わりなどを通してどのように行われたかを考察する研究」と定義しておくことにします。

しかし、これまで発行されてきた『東北学院英学史年報』に、「英学」や「英学史」の定義が明示的に示されているわけではありません。主に、広狭二つの意味で使われています。一つは、英文で記された英詩を含む英文学や英語音声学を含む英語学その他の分野などの英語文献学的研究、そして、それらの教授法や教授の実態研究、もう一つは、英語教育研究と実践研究となります。東北学院の学科課程(カリキュラム)で「英学」という言葉が外国語教科の一つとして使われた事実もあります。例えば、『東北学院百年史資料編』(1990、63頁以下参照)には、1892(明治25)年の理事会記録として学科課程の改正の記録が収録されています。それによると、予科第1年級では訳読、綴字、発音、習字と下位分類され、

第2年級では訳読、綴方、書取、発音となり、第3年級では訳読、文法、綴方、書取、作文となっています。本科第1年級では、訳読、文法、会話、作文と、予科同様、今でいう一般英語科目を指して「英学」という言葉は用いられていますが、本科第2年級から「英学」には今でいう専門科目も含まれるようになります。「英学」は修辞、作文、英文学となります。本科第3年級からは「英学」から一般英語がなくなり、英文学史のみとなり、本科第4年級では高等英文学（詩歌之類）のみとなります。邦語神学部学科課程には「英学」という科目はあっても中身の詳細は記されておらず、一方、英語神学部の学科課程には英語の習得が前提とされるせいか「英学」はなくなっています。英語神学部教育全体が英学教育であったとも言えます。

以上、「英学」というものが広狭二つの意味で考察され、明治以降の近代化や建学の精神継承に関わるものであることを考察してまいりました。

3. 新制東北学院大学英文学科発足前後期とその発足よりおよそ15年までの英学

以下では、太平洋戦争前後の個人的体験を混じえながら、新制大学として出発した東北学院大学文経学部英文学科初期15年の「英学」を簡単に振り返ってみたいと思います。

英語を媒介としてなされてきている日本の近代化教育を考える時、そこにはその時その時の英語という言葉に対する社会的なまた文化的な意識が関与して来ます。その時その時の政治や経済、文化等の国際情勢が教育に関連し反映されてきます。大谷泰照著『日本人にとって英語とは何か』（2007、大修館書店、83-142頁）では、日本人の言語・文化意識の変化の指標を定め、ほぼ40年の周期で英語一辺倒のいわば英語蜜月段階である「親英」的時代、英語に対して拒否的反応を強める英語不適合段階である「反英」的時代が反復するとみています。岡田、ハヤシ、嶋林、江原共著の『基礎から学ぶ英語科教育法』（2015、松柏社、8頁）は、明治維新後の「親英」と明治後半の「反英」、大正時代の「親英」と昭和初期の「反英」、第二次大戦後の「親英」というものを要約し、次の(11)のように述べています。²⁾

(11) [親英] 明治維新後の「親英」論：明治維新後、まず英語公用語（国語）化論を唱えたのは森有礼である。森は、日本は将来的な繁栄のためにヨーロッパの言語を採用しなければならないとし、学校教育への“simplified English”の導入を提案している。森の提案は実現には至らなかったが、英語公用化論の先駆的な提言である。

[反英] 明治後半の「反英」論：大日本帝国憲法が公布される頃（1889）から日清、日露戦争にかけては国粹主義的傾向が強まりを見せた。そのような社会情勢の中、ナショナリズムの台頭で反英語の機運が高まり、国語教育の強化が図られた。

[親英] 大正時代の「親英」論：日露戦争に勝利した頃から、いわゆる大正デモ

クラシーの時代にかけて、英語のみならず、外国語学習の機運が高まった。(先述の) ハロルド・パーマーが英語教授研究所の所長として招かれたのはこの時期である。

[反英] 昭和初期の「反英」論:すでに大正時代から英語教育への反発の芽は育っており、1916(大正5)年には、大岡育造が「教育の独立」と題して英語廃止論を発表した。1927(昭和2)年には国文学者の藤村作が「英語科廃止の急務」を発表した。その後、第二次大戦がはじまり、米国の参戦に至り、英語が教育の表舞台から姿を消されることになった(ことは、先述の通りである)。

[親英] 第二次大戦後の「親英」論:第二次大戦に敗れ、連合軍の統治下となった日本で、志賀直哉と尾崎行雄は相次いで日本語廃止論を唱えた。彼らは、それぞれが日本語不完全論を発表し、志賀はフランス語を、尾崎は英語を公用化すべきであると主張した。

大谷は「異文化との決定的な衝突による敗北を契機にして、日本人が見せる「反英」から「親英」へ、自信過剰から自信喪失へ、傲慢から卑屈への極端までの変貌ぶりは、基本的には異文化そのものの過小評価と過大評価、つまりは異文化理解の甘さや未熟さに起因せざるを得ない」(119頁)と述べ、「親英」とか「反英」とか、それらのサイクルからも自由になりうる「知英」の立場を、次のように提唱しております。(100-101頁)

(12) 英語教員の本来の役割は、英語という特定の言語の愛好者や支持者を育てるというよりも、おそらく、英語やその文化について、学習者に新鮮な関心と出来るだけ偏りのない理解をもたらせることではないのか。それは、単に英語という特定の言語だけでなく、ひいては異質の言語・文化一般に対してわれわれの目を見開かせることにも通じるはずである。「親英」よりも、むしろ、いわば覚めた目の「知英」を目指す教育である。

「知英」の態度は、建学のキリスト教精神を伝承しようとする東北学院の「英学」教育のキリスト教文化と信仰を伝承するという目的と矛盾するものではありません。

私が塩釜市に生まれたのは1939(昭和14)年10月で(今年2018年夏行方不明の2歳男児発見者でヴォランテアとして話題になった尾島春夫さんと同年同月生まれ)、2年後に太平洋戦争が勃発し、1945(昭和20)年に終戦となり、翌年の1946(昭和21)年に小学校に入りました。入学式への途上かと思いますが、小高い丘の上にある奉安殿に保護者が礼をして通る姿を目撃したものです。未だ尋常小学校だったと思いますが、翌年の1947(昭和22)年から新制度の塩釜市立第二小学校となったはずです。門柱の表示が変わったのを

覚えています。(11) で仮定されている第2番目の「反英」期と第3番目の「親英」期に幼年時代を過ごしております。終戦直後からの小学校教育では、鬼畜米英や英語が敵性国家の忌避すべき言語という価値観を植え付けられることなく、アメリカ式のよき市民を育てる民主教育である「親英」の教育を主体にした教育を受けたように思います。しかし、それでも、「反英」の蔭は幼少期に覚えた次の歌を今でも口ずさめることから、何らかの形で残っていると考えられます。すでに小学生であった兄を含む家族から覚えたのだらうと思います。

(13) ルーズベルトとチャーチルが林の中で、泣いていた。
それを見ていた東条さん、お腹を抱えてワッハッハ。

これは「たんたんたぬきの〇〇は、風もないのにぶーらぶら。それを見ていた親だぬき、おなかをかかえてわっはっは。」という替え歌を基にしていると思われますが、元歌は次の讃美歌のようです。“Shall We Gather at the River”（「川のほとりに集まろう」）というもので、大学時代とわかる自分の署名入りの讃美歌集 *The Hymnal—Army and Navy*（COPYRIGHT, 1941, BY A. S. BARNES AND COMPANY, INCORPORATED）の534番の讃美歌（聖歌）です。その第一節の歌詞だけを引用すれば次の(14)のようになっています。（他の歌詞やメロデーは後掲資料1を参照）。

(14) Shall we gather at the river
Where bright angel feet have trod;
With its crystal tide forever
Flowing by the throne of God?
(REFRAIN)
Yes, we'll gather at the river,
The beautiful, the beautiful river;
Gather with the saints at the river,
That flows by the throne of God.

インターネットの worldfolksong.com では「まもなくかなたの」と題されて、歌詞の内容は、新約聖書・ヨハネの黙示録第22章で預言されている「新しいエルサレム」（神の都）での再会を期待するもので、葬儀の場で歌われることがあると説明し、この一番の歌詞の大意を(15)のように示しています。

(15) いつの日か集わん / 輝く御使い 水晶の波 / 神の御許の流れのそばで
いつの日か集わん / 美しき流れのそばで / 聖人とともに / 神の御許の流れのそばで

キリスト教国と考えられた文明国の讚美歌を諧謔的卑俗な替え歌にして鬼畜米英を小学校教育の中で喧伝し、敵性国家への敵愾心を煽ったのでした。戦中の第二のサイクルの「反英」は反キリスト教でもあったとも言えます。今でもこのメロデーは東京池袋のビッグカメラのテーマソングとなっているらしく、「不思議な不思議な池袋 東が西武で西東武 高くそびえるサンシャイン ビックビックビックカメラ」と歌われるそうです。今や、鬼畜米英や敵性国家という敵愾心をこのメロデーに感じる人はなくなっているように思われます。隔世の感があります。

しかし、この「反英」の風土の中でのキリスト教学校の英語教育者の苦労は並大抵のものではなかったことが察せられます。大場時也は「戦時下の中学校英語の回想」（『東北学院英学史年報』第21号、2000、14頁）で、同級生の話として、児玉省三が「目下戦時の敵国語であっても、思考の精密さと記憶力、判断力の養成強化のために勉強するのだ」と言ったと紹介しております。須田稔先生も『『東北学院中・高校』と『英語教育』と『わたし』』（『東北学院英学史年報』第25号、2004、14頁）でより複雑な思いで次のように同じ児玉省三からの熱心な戦時下の英語教授を回想しております。

- (16) いまになって考えますと、英語は敵性国家イギリス・アメリカの国語であるからこそ、よりよく敵のアイデンティティを認識理解することにより、敵に勝利するための手段として勉強するのだとの思いもあったのですが、東北学院当局の思いは、忌まわしい戦いの終結の暁には、これまで以上に英語が国際語として頻繁に使用され国際的平和安寧の確立に必要なものとなっていくはずだとの深い読みと先見の明から由来したものであろうと推測されます。児玉先生は東京文理大学を卒業後、昭和15年4月に母校東北学院に赴任されて4年目の30歳前後の若々しい新進気鋭の英語教師でした。

第2サイクルの「反英」の時代にあっても、東北学院の英語教育の「知英」の態度は貫かれたのでした。

私が新制の東北学院中学校に入学したのは1952（昭和27）年で、最初の英語教師は清水造三で、一学期は英語母語話者ではない清水一人が英語だけで授業する学期末テストがない授業でした。ディレクト・メソッドの実践でした。コミュニケーションの得意な私にとっては実際に胃の痛くなる授業でした。しかし、鈴木進が英語音声学を担当し、ゲルハード式発音記号を修得できたのは幸いでした。塩釜市立第二小学校卒業時に優等賞としていただいた三省堂の『コンサイス英和辞典』がゲルハード式発音記号を採用していたので、お蔭で初めて遭遇する語彙の発音に苦勞することはありませんでした。記号方式発案者のロバート・ゲルハードはすでに新制東北学院の教授から新制国際基督教大学の教授へと転身しておりました。

東北学院高等学校に入学したのが 1955(昭和 30)年でした。その頃はまだ苦竹の米軍キャンプに米軍が駐留しておりました。ある日電車の中で “How far is it from here to Tokyo?” と習ったばかりの英語表現を暗記していると、覗き見た米軍将校が “Tokyo is how far from here?” と “From here to Tokyo how far is it?” ととも言えるよと教えてくれました。どんな英語の会話をしたか今は覚えていませんが、今となっては話題化という談話文法の規則を教えてくれたのでした。このことを担任英語教師に伝えると、「G I の英語は信じるな」の一言でした。病気のために一年半を休学し、高校 2 年を 2 度体験しましたが、高校時代の英語習得と人間形成に貢献してくれたのが、高校友人たちと錦町にあった米国人宣教師ヘンリーご夫妻宅でのバイブル・クラスでした。

大学には 1959 (昭和 34) 年に入学しました。前述の児玉省三が私の大学時代の恩師の一人です。2 年生の時点から、一般英語と英語音声学、教科教育法の授業を 3 年間受け、卒論の指導も受けました。児玉省三の音声学授業については、『東北学院英学史年報』の第 14 号 (1993、1-49 頁) に私自身が詳述しています。ゲルハートの発音記号についても言及しております。当時は、規範文法の伝統文法と対立する記述文法のアメリカ構造言語学が盛んな頃で、英語教科教育もパターン・プラクテスが主流で、日本語での文法の説明が許されたものでした。私が中学時代に体験したディレクト・メソッドは影を潜めてしまっておりました。清水浩三はこれをオーラルアプローチを含め「ゲルハート・メソッド」と呼んでいます (「東北学院の英語教育とゲルハート・メソッド」、『東北学院百年史各論篇』、1991、407-443 頁参照)。大学 4 年の東北学院高校での私の教育実習でも、パターン・プラクテスを必ず導入する授業を実践したものでした。

大学同級生に、大学卒業後に福島県の大葉高校英語教師となり、米国留学した後に認知心理学を専攻し、福島大学や兵庫教育大学教授を歴任した二谷廣二君がおり、彼は『東北学院英学史年報』第 21 号 (2000、27 頁) で、中学高校時代の 6 年間、松本亨の NHK 「ラジオ英会話」を聞き続け、そこで使われた役に立つ表現をすべて暗唱するまで努力した自分を「英語中毒症にかかっていた」と回顧し、「特にアメリカ人教師が数多くいるキリスト教系で、英語教育界では名の知れた東北学院大学の文経学部の英文学科に進学することになった」と振り返っています。大学入学後も、同じく「英語中毒症」の同級生鈴木弘志君とともに、私も 2 年次 3 年次にリーダーを務めた英会話クラブの E S S に所属し、在学中の 4 年間は二人の間では英語で会話をするという約束をし、それを実行しておりました。二人が英語だけで昔宣教師館であった部室の外で対話しているのを、昼休みごとに目撃しております。英語の慣用表現のハンドブックを丸善などで買い求め、絶えず身から放さず持ち歩き、「覚えるは使う」、「覚えるは使う」の繰り返しの日々であったとのことであります。鈴木弘志は卒業後アメリカの神学校で学び、ニューヨークで牧師・ソーシャルワーカーとして精神分析によるカウンセラーとして活躍をしました。1977 年ニューヨークで再会したときに出版されたばかりの Carl Rogers の原書 *Carl Rogers on Personal Power* (1977, Delacorte Press, New

York) をいただき、カウンセリングの学びを深めることができました。二谷廣二は中高教科書出版会社の開隆堂出版から『すぐ役立つ教室英語』を1977(昭和52)年に出版し、鈴木弘志は大学教科書出版会社の英友社から『英語のまちがい』を1995(平成7)年に出版しています。二人とも東北学院が誇る実学的英語の達人であったと今は思います。

宣教師の影響からメソヂスト教会に所属し、日本英詩人会を結成した北星学園大学名誉教授の矢口以文氏は私らの大先輩であり1955(昭和30)年卒業の第3回生ですが、彼もまた友達の中に広がった「学院の英文はええんだってさ」という小さなうわさが東北学院大学入学を選択するきっかけになったと『東北学院英学史年報』第21号(2000、19頁)に記しています。これら三人の同窓生を実践的英語を用いる生業へと導いたのは、英語が大好きだったということと同時に、「学院英語」への憧れと米国人宣教師からの学びであると、自信をもって言えます。

矢口以文氏は高校教諭を辞めた後、米国留学前に国際基督教大学大学院に入学しています。英文学科とESSの2年先輩の鈴木榮一氏も矢口の修了直後に国際基督教大学大学院で学ぶことになり、矢口と鈴木は石巻商業高校の同窓でもあったので、一度矢口を尋ねてきたことがあったとのこととあります。「お前のやりたいこと、ICUでやってるよ」と私に国際基督教大学での学びへと誘ってくれたのは、この鈴木榮一でした。鈴木は惜しくも若くしてなくなりましたが、東北学院大学に文学部が発足する1964(昭和40)年に東北学院大学に奉職しています。英会話と英作文を得意とし、中世英語英文学研究で業績を残し、研究社の『新英和大辞典』などの編纂にも携わった誇るべき先輩であります。領域を超えて、後輩たちの学術研究に及ぼした影響は計り知れません。鈴木氏の「英語学と英語教育」については、砂澤健治「鈴木榮一先生流の英語学と英語教育」(『東北学院英学史年報』第35号、2014、23-28頁)に記されています。東北学院大学の縁の鎖を感じます。

もう一つの縁は、もう一人の同級生の小幡光正君が酪農大学の教授となり、前述の矢口以文と同じクリスチャンとしての親交があったこととあります。小幡氏は2009(平成21)年に天に召されましたが、その告別式で矢口氏が弔辞を述べたとの報しらせから知ることになりました。³⁾小幡氏は大学卒業後に東北学院大学大学院前進の1年課程の専攻科に進学し、英文学を専攻しています。篠崎書林からルイス・ロレンスの小説『灰のまつえい』を翻訳出版していますが、物語は核戦争勃発による人類滅亡とその発展の克明なドラマであります。小幡氏は「人類皆殺しの核戦争が起こったにもかかわらず、その再生を願わざるをえない作者渾身の祈りの書!」と「訳者あとがき」に記しています。発行の年は1987(昭和62)年で、出版後直ぐに贈呈され大事にとっている訳本であります。彼から「東北学院の外に出た研究者にとって、母校で働く君のような人間は羨ましい」と言われたことがあります。母校東北学院大学を思い、心から愛し、キリスト教信仰を証し、建学の精神を伝承している同級生の存在の大きさを意識させられました。

文経学部英文学科の草創の1949(昭和24)年度の英文学科教育課程(カリキュラム)

については、須田稔が「東北学院専門学校英文科と東北学院文経学部英文学科の学生生活を偲んで（昭和23年4月～昭和28年3月）」（『東北学院英学史年報』第17号、1996、34-37頁）に、平成元年度のものとは対比させ紹介しております。志子田光雄も「東北学院「英学」の伝統と大学「英語英文学教育」を始動させた群像」（『東北学院百年史 各論篇』、1991、448頁）の中で、第二次大戦終了の翌年の1946（昭和21）年に発足した東北学院専門学校英文科の教育課程を色濃く受け継いだ新制東北学院大学文経学部英文学科の教育課程を記述しております。この文経学部はそれぞれ経済学部と文学部へと1964（昭和39）年に分離独立します。最後の文経学部英文学科入学生が後輩の戸田征男君で当時の教育課程、講義内容や担当者について「東北学院大学文経学部英文学科最終入学年度生」（『東北学院英学史年報』第23号、2002、22-52頁）に詳述しております。現在の英文学科の教育課程と比較して、大きな違いは、今の英語学、英米文学、コミュニケーションの専攻別による演習履修ではなく、英米文学と英語学の両領域が必修であったことです。文経学部時代は、オールラウンドに文学と語学に強い英語教師養成の評判が立つほどの教育課程でしたが、300名定員の日本一大きな英文学科となった文学部英文学科には大衆化に逆らえない実態があったのでした。

私の在学中の今で言うシラバスである『学生要覧』ないし『大学要覧』を見たところ、その「東北学院の沿革」の最後の結びには、「なお本院は米国伝道局の理解ある援助のもとに多数の外国人教師を迎え、語学の教育の実際に資すると同時に、広く新智識を導入し、社会意識の錬磨、国際的良識の涵養、世界的視野の拡大等にも特別なる工夫を図っている」とありました。私が在学中に発行された分の英字新聞 *Fair Gakuin* の創刊号から第10号までを読むと、指導にあたった米国宣教師を E S S や英字新聞部の学生だけでなく、小田忠夫大学長・院長ご自身が彼らを如何に大切に尊敬していたかがわかります。（この期間の英字新聞 *Fair Gakuin* については、平河内健治「英字新聞 *Fair Gakuin* の軌跡—創刊号（1959）から第10号（1962）まで—」（『東北学院英学史年報』第24号、2003、17-40頁）参照。）英字新聞には、聖書の解説や宣教師の動向も記されています。これは、当時の『東北学院時報』と共通するところです。

私は10年以上キリスト教学校で学び、東北学院奉職の2年目の1966（昭和41）年8月の平和聖日に、日本人牧師と米国人牧師の下、キリスト教の受洗をしております。与えられた聖書は「平和をつくり出す人たちはさいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう。」です。米国宣教師や尊敬するクリスチャン教師の英語と聖書の指導の下で、今があります。新共同訳を用いれば「平和を実現する人」となれるよう祈り願う日々であります。

4. 「英学」教育の目的と三つのサンプル教材

すでに見たように、キリスト教学校の「英学」の目的は英語の運用力の涵養とキリスト教の人間観や世界観を伝え、人間形成に寄与することにあります。最近東北学院スタッフや同

窓生によって編纂出版された村野井仁編著『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』（2018、大修館書店、22頁）では英語教育の目的を、教育基本法の教育の目的を引用し、その関連で、次の（17）のように述べています。キリスト教学校にとっては、これがキリスト教建学の精神に基づいて実践されることが望まれるのは当然のことです。

（17） 教育基本法は、教育の目的は個人の人格の完成をめざし、平和的で民主的な社会を作ることを明確に示している。学習指導要項はこの教育基本法および学校教育法を踏まえたものであるため、教科指導を含む教育活動の目的は上記の「教育の目的」につながっていると言える。

児童生徒の外国語によるコミュニケーション能力を伸ばすこと、寛容さを持って他者と協力しながら共に生きていく異文化間能力を育てること、社会や世界で起きていることについて深く考え、判断し、それを伝える力を育てること、これらの英語教師の仕事はすべて一人一人の児童生徒の人格を育て、平和ですみやすい寛容な社会を作ることを目的として行われるものであると考えることができる。

齋藤孝は、「コミュニケーション」を岩波新書の『コミュニケーション力』（2004、岩波書店、2頁）の中で、「意味や感情をやりとりする行為」と端的に定義づけ、やりとりする相互性による人間理解に重点をおきつつ、人を愛することと、人を理解することのどちらが基礎的かを問う人間理解が基礎であると主張しております。私のキリスト者としての立場に通じるものがあります。旧約聖書の創世記に「バベルの塔」の話がありますが、人間の傲慢さを正すために、最初一つの言語であったものを神がそれを乱し、通じなくしてしまったという物語があります。神が行ったことは、それ故に、神の恵みであり、それによって謙虚に聞くことができるようになったと信じることができます。俵万智の『サラダ記念日』（1987、河出書房新社、21頁）にある「わからないけれどたのしいならばいいともおもえないだあれあなたは」という和歌は、わからないからこそ、「だあれあなたは」と問い、ここに愛が生まれることを示しています。わからないことを前提にして、謙虚に聞き、戸惑いを喜びに替えて愛が育つことを「バベルの塔」の物語や俵万智の歌は示しています。まさに「英学」における「知英」の立場であります。いわゆる「生きる力」を育てることや「知識基盤社会」を生き抜く「グローバル教育」としての英語教育の提案のある中で、キリスト教を基に、「知英」の立場から人を理解し尊敬し愛することを、そして、真の自由を求める大切さを英語教育の中で貫くことが建学の精神継承に繋がる道と信じることができます。

以下、そのための教材例を三つ紹介し、本稿の結論としたいと思います。

一つは、Raymond Briggs の漫画本 *When the Wind Blows*（1983、Penguin Books）の最後の場面です。この漫画は、引退した一老人が図書館から自宅に帰った後、新聞を読みながらのラジオ放送で、核戦争が勃発したことを知り、政府の助言を素直に聞き、市井の素朴な

主婦である老妻とともに、たまたま図書館から持ち帰った手引書に添って、自宅を粗末な核シェルターににわか改造し、死の灰から逃れようと努めますが、最後は力尽きてこの地球を去る老夫婦の姿を風刺的・諧謔的に描いている漫画です。利用できる教材例として、最後の24コマの英文吹き出し文(18)と漫画のタイトル自体を考察してみます。(18)では、Jは主人公 James を H はとその妻 Hilda のセリフであることを示しています。...は無言のコマを現しています。()内は、1982年の篠崎書林初版発行のレイモンド・ブリッグズ作/小林忠夫訳『風が吹くとき』の小林訳です。

- (18) 1. H: Shall we pray, dear? (お祈りをしましょうよ)
2. J: Pray! (祈る!)
3. H: Yes (そうよ)
 J: Crumbs! Who to? (ちえっ!だれに?)
4. H: Well.... God, of course (それは.... もちろん、神様に)
5. J: Oh I see....Yes....if you think it would be the correct thing.... (うん、わかった.... それがいいことだと思うんなら....)
6. H: It can't do any harm, dear (害にはならないわ)
7. J: OK~ Here goes~ er.... (よしー さあ始めようー えーと...)
8. J: Dear Sir~ (いとしの君よ~)
 J: No, that's wrong (いや、これは間違えた)
9. J: How do you start? (初めはどうだっけ?)
10. H: Oh God.... (あー神よ....)
 J: Our Help in Ages past (世々われらを助けたまいし)
11. H: That's it! Keep it up (そう!続けて)
 J: Almighty and Most Merciful Father....er.... (全能にしていと憐れみ深き父.... えーと....)
12. H: That's good (そうよ)
 J: Dearly Beloved.... (最愛の....)
13. J: We are gathered...~er.... (われらはともに.... えーと)
 J: ...unto thee (...汝のもとに)
14. J: I shall fear no Evil Thy Rod and Thy Staff Comfort Me All the Days of My Life (われはわざわざいをおそれじ なんじの笞、なんじの杖 わが日々を慰む)
 J: er.... (えー....)
15. J: Lay me Down in Green Pastures (われを緑の野辺に伏させ)
16. ...

17. J: I can't remember any more.... (そこから先忘れた....)
18. H: That was nice, dear. I liked the bit about the green pastures
(すてきだわ 緑の野辺というところがよかった)
19. ...
20. ...
21. J: Oh yes.... Into the Valley of The Shadow of Death.... (そうだ.... 死の陰の谷に....)
22. H: Oh no more, love.... No more.... (もういいわ、あなた.... もう....)
23. ...
24. J: ...rode the Six Hundred.... (... 600の兵士死地に....)

先ず、漫画のタイトルは(19)に示したマザーグースからで、これを聞くとイギリス人にとっては、風が吹くと、いつ赤ん坊が休んでいるゆりかごが落下するか気が気でない不安や恐怖を感じられるというもので、胸を痛めつけられる童謡です。これはブリッグズの漫画の背表紙にも多少異なる形で印刷されています。⁴⁾

(19) Hush-a-bye, baby, on the tree top,
When the wind blows the cradle will rock;
When the bough breaks the cradle will fall.
Down will come baby, cradle, and all.

(20) ねんねんころりよ きのこずえ
かぜがふいたら ゆりかごゆれる
えだがおれたら ゆりかごおちる
あかちゃん ゆりかご なにもかも

(20)が谷川俊太郎の日本語訳詞です。「ねんねんころりよ きのこずえ」というタイトルになっています。面白いことに、谷川訳に付けた堀内のイラストでは赤ん坊のいるゆりかごは地上に置かれ、原詩の木の枝にかかる赤ん坊のいるゆりかごは小鳥の巣に替えられ、落下の恐怖は和らげて描かれております。1970年代の教育的配慮があったのかもかもしれません。これらは、草思社から1975年に発行された谷川俊太郎訳/堀内誠一イラストレイション『マザーグースのうた第2集』に載っているものです(10頁)。異文化理解や文学鑑賞と教育的・道義的配慮のある種の衝突問題が提起されます。

一方、漫画の最終場面(18)の神様への祈りは、詩編第23編(21)を揶揄したものであることは明らかです。

- (21) THE LORD is my shepherd; I shall not want. ²He maketh me to lie down in green pastures: he leadeth me beside the still waters. ³He restoreth my soul: he leadeth me in the paths of righteousness for his name's sake. ⁴Yea, though I walk through the valley of the shadow of death, I will fear no evil: for thou *art* with me; thy rod and thy staff they comfort me. ⁵Thou preparest a table before me in the presence of mine enemies: thou anointest my head with oil; my cup runneth over. ⁶Surely goodness and mercy shall follow me all the days of my life: and I will dwell in the house of the LORD for ever.

主は羊飼、わたしには何も欠けることがない。²主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、³魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしくわたしを正しい道に導かれる。⁴死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れな
ない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖それがわたしを力づける。⁵わたしを苦しめる者を前にしてもあなたはわたしに食卓を整えて
くださる。わたしの頭に香油を注ぎわたしの杯を溢れさせてくださる。⁶命のある限り恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り生涯、そこに
とどまるであろう。(日本聖書協会 1987、1988 年発行の新共同訳より)

また、(18) のコマ 24 の最後の祈りの "...rode the Six Hundred..." は、イギリスの桂冠詩人テニスン (Alfred Tennyson) の「軽騎兵の突撃」(The Charge of the Light Brigade) という詩からの引用です。(22) は第二節の引用で () 内は日本語訳です。(「軽騎兵の突撃 - テニスン (詩) - へ短調作品 34 - Yahoo! ブログ」より)

- | | |
|------------------------------------|----------------|
| (22) "Forward, the Light Brigade!" | (「軽騎兵 総員前進」 |
| Was there a man dismay'd? | 怯えていた兵士はいたか? |
| Not tho' the soldier knew | いない 指揮官は誰かの |
| Someone had blunder'd: | 間違いだと分っていたが |
| Their's not to make reply, | 兵士たちは無言で |
| Their's not to reason why, | 理由を聞くことなく |
| Their's but to do and die: | ただ命令に従い死地に向かう。 |
| Into the valley of Death | 六百騎の兵は全員 |
| Rode the six hundred. | 死の谷へと進む) |

漫画の翻訳者小林忠夫は「あとがき」の中で、その後半部分を「彼らのなすべきことは答えることにあらず、彼らのなすべきことは論ずることにあらず、彼らはただ戦い死すのみ /

死の谷に / 六百の兵士は進む」と訳し、「テニソンが 1854 年に発表したこの詩はクリミア戦争の歌で、イギリスの軽装備旅団 600 人が、彼らに下された命令の愚かさを知りつつもロシアの砲兵隊に斬り込み、ほとんど全滅したことを歌った、まことに愛国的な詩です」と説明しております。

『風に吹かれて』の漫画では、核戦争に生き延びるために政府の助言を聞き、当局を疑うこともせず、その結果、ボロボロになった我が家と核戦争に汚された地球を去らざるを得ない老夫妻の姿、美しい故郷の地球に帰るあてのない不安な姿が描かれております。ここには、誰かに頼れる救いはあるのでしょうか？ Jim のように「ちえっ！だれに？」と問い正しくなります。前節で紹介したロレンス作小幡光正訳『灰のまつえい』では放射能被害による人間ために奇形児子孫とシェルターに逃れ育ち防護服を纏って外出せざるを得ない人間子孫の対話が、(14) (15) に示した、そばを命の水が流れる新しいエルサレム（旧約聖書「詩篇」第 46 篇にもある「神の都」）の到来（「ヨハネの黙示録」第 21 章 9 節以下が示す終末のイエスの再臨）を示唆しています。村上伸（2014、190 頁）によれば、「黙示録」の新しいエルサレムの箇所は全体としてエゼキエル書第 40 章以下の影響を受けているとのことであり、エゼキエルがバビロニア捕囚後に見た神殿の幻が下敷きとなっているとのことでもあります。

マザーグースの「風が吹くとき」の恐ろしさや悲しみ、残酷さを示唆していると思われるのが、紹介する二つ目の教材 2016（平成 28）年度ノーベル文学賞をとった ボブ・ディラン（Bob Dylan）の 1962（昭和 37）年作 *Blowin' In the Wind* 「風に吹かれて」の歌です。岡田、ハヤシ、嶋林、江原（2015、松柏社、229 頁）では、教材例として提示しています。歌詞の (23) を印刷し、穴埋め問題として曲を聞かせることから始まり、how の用法の解説による「基礎固め」をし、接続詞 before と till (until) の用法へと「ステップアップ」させ、最後に「こぼれ話」の異文化理解へと進める手順を資料として提示しています。（全文は後掲資料 2 を参照）

- (23) How many roads must a man walk down
Before you can call him a man?
Yes, n' how many seas must a white dove sail
Before she sleeps in the sand?
Yes, n' how many times must the cannon balls fly
Before they're forever banned?
The answer, my friend, is blowin' in the wind,
The answer is blowin' in the wind.
(以下二番、三番は省略)

最後の「こぼれ話」は、いわゆる「英語世界の常識」と私が呼ぶ事項を述べています。(平河内(1986)を参照)。岡林等は、ディランがフォークソングの神様であると、(24)のように述べています。

(24) ボブ・ディランは1941年に生まれました。彼は独学でギターを学び、1980年代に反戦歌を歌い、注目を浴びました。その後、彼は数々のアルバムを出しましたが、彼の曲はビートルズやローリング・ストーンズなどのグループを始め、多くの歌手に大きな影響を及ぼし、ディランはフォークソングの神様と呼ばれる存在となりました。

“Blowing’ in the wind”はPPM (Peter, Paul & Mary) が歌い大ヒットしました。他にスティービー・ワンダーもカバーしています。そのモチーフはもちろん戦争の批判にあります。冒頭の一節、“How many roads must a man walk down before you call him a man?” とは兵士が戦地を歩き回る姿を想像させます。また、“How many deaths will it take till he knows that too many people have died?” は、戦争によって、殺戮を繰り返す人類の愚かさを痛烈に批判しています。

これをさらに発展させれば、次のことが追加できます。この歌には下敷きにした元歌があり、それは次の(25)に示した19世紀アメリカ黒人霊歌のNo More Auction Block だそうです(岩波新書の湯浅学著『ボブ・ディラン—ロックの精霊—』(2013、岩波書店、63頁参照)。Auction Block というものは黒人奴隷が競売にかけられる時に載る台のことを言います。一節、五節、八節を下に引用します。そこには束縛される悲しみと自由への憧れを感じます。何百回と数えられる鞭の音に耐える黒人奴隷の姿が浮かびあがってきます。

(25) No more auction block for me	No more hundred lash for me
No more, no more	No more, no more
No more auction block	No more hundred lash for me
Many thousand gone	Many thousand gone
No more slavery chains for me	
No more, no more	
No more slavery chains for me	
Many thousand gone	

ボブ・ディランの「風に吹かれて」は、作詞作曲当時アメリカで問題になっていたベトナム反戦運動や公民権運動の中で、プロテスト・ソング(抗議の歌)として、必ず歌われたも

のです。しかし、ディラン自身は後に家族が属したユダヤ教からクリスチャンに改宗はしましたが、彼にとってこれは反戦歌ではなく宗教色を伴わない普遍的な価値観である自由を求め苦悩する人間の悲しみと自由への憧れを歌ったもののようです。湯浅は前掲書（64頁）で言います。「世相を糾弾しているのではなく、人間のやるせなさの基盤、不変と言いたくなる虚無的感情を描いている。人類は答えを求めつづけていながら、つねにその答えを踏みにじりつづけている。この歌の「何故」に対して答えを安直に出そうとする人間を信じてはいけなく、とボブは呼びかけているのではないか、と思う。」しかし、私には、ここにも旧新約聖書に基づく普遍的価値観が見られると感ずることが出来ます。

これら二つの教材例は、次の三つ目の教材例 Peter, Paul & Mary の “500 miles” を連想させてくれます。⁵⁾

(26) If you miss the train I'm on, you will know that I am gone
You can hear the whistle blow hundred miles,
A hundred miles, a hundred miles, a hundred miles, a hundred miles.
You can hear the whistle blow a hundred miles.
Lord I'm one, Lord I'm two, Lord I'm three, I'm four,
Lord I'm 500 miles from my home.
500 miles, 500 miles, 500 miles, 500 miles
Lord I'm five hundred miles from my home.

Not a shirt on my back, not a penny to my name
Lord I can't go a-home this a-way
This a-way, this a-way, this a-way, this a-way,
Lord I can't go a-home this a-way.

If you miss the train I'm on, you will know that I am gone
You can hear the whistle blow a hundred miles.

この歌は、アメリカ大恐慌時代に故郷を訪れた放浪者（ホーボー）の気持ちを歌にしたものと言われますが、愛する人の見送りか救いの手を待つ淡い希望をもちながら、故郷の家を離れ鉄道の旅に出ざるを得ない人間の感情や想い、身に着ける立派な服もなく、お金もなく、故郷の家に帰ることができないかもしれない、でも帰りたい、その淋しさと将来の僅かな希望と大きな不安とを、主と自分と愛する人に向かって、乗った列車の汽笛の一声一声に乗せて伝えようとしております。人間はこの地球上で、何処に向かって歩むのか、不安と不自由の拘束の中で自由を求めて行く人間の業や罪と呼ばれるものからの救いが扱われているとも

言えます。

キリスト教の建学の精神を伝え得る教材として、三つのサンプルを示してきましたが、このようにして、「知英」の「英学」を目指すことによって、キリスト教建学の精神が、東北学院人間教育に受け継がれてゆくことを祈念しております。

5. おわりに

最後に一言申し上げて、本稿を終わりにしたいと思います。

2018（平成30）年7月19日（木）にランカスター神学校と東北学院大学との学術交流締結式が執り行われました。記念講演はランカスター校長キャロル・リッチ博士（Dr. Carol E. Lytch）の Christian Faith Today in the 'Religious Market Place' of the United States（今日のキリスト教信仰—アメリカ合衆国の「宗教市場」のなかで—）というものでした。私の印象に残ったのは、質疑応答の中でリッチ博士が「自分はどの教派に属するかよりも、クリスチャンの立場を重要視する」という趣旨の発言です。アイデンティティは大事ですが、レッテルやカテゴリーに捉われない神の下での自由を求めるクリスチャン教育者や宣教師との交流が深められることを期待したいものです。

リッチ校長とは、2014年1月に北アメリカ支部同窓会に出席の折、姉妹校アーサイナス大学とフランクリン・アンド・マーシャル大学、そして、ランカスター神学校に東日本大震災の被災の折りの支援に対してお礼に伺う機会に恵まれましたが、彼女とは昼食会でわずかな時間を一緒に過ごしていただけでしたので、帰国後にメールで、宣教師の派遣を重視する施策を今後考えたい旨伝えました。その後復旧・復興の業務に忙殺されていたので、詳細を相談したり、まして、相互交流は実現しておりませんでした。今回の締結を機に、キリスト教建学の精神を伝承する務めを今後も日本人・アメリカ人が共に手を携えて果たすことを期待しております。

これで私の話は終わります。ご清聴ありがとうございました。

注釈：

* 本稿は 2018（平成 30）年 9 月 3 日開催の東北学院大学第 63 回教職員修養会で発表した同題講演内容に加筆・修正を加えたものであります。口調を含む内容の大部分は当日のままですが、不十分であった文献や不正確であった口述を主に注釈の形で修正・追加しております。また、時間の都合上、略述せざるを得なかった第四節のサンプル教材をも再度検討し直しています。当日コピー資料として提示した Briggs（1983）の漫画の最終場面と背表紙のアザーゲース、谷川・堀内（1975、10-11 頁）の絵の三つは著作権の関係上省略し、本文の中に引用し説明を加えました。英文讃美歌 534 番と岡田他（2015、229 頁）のみ後掲資料として明示しました。

- 1) 高橋（2018）は、1886（明治 19）年に、同志社側が同志社分校の「宮城英学校」を設立し、東北学院側が「仙台神学校」を設立して、結局は、この葛藤に決着をみますが、当時日銀副総裁であった仙台出身の富田鐵之助が同志社側をリードしたということを明らかにしております。また、押川は翌年「山形英学校」を設立しますが、そこを視察する当時の文部大臣森有礼との間に確執があったことをも指摘しています。
- 2) 講演の資料では、大谷（2007）の指標である表 2-2 の資料（86-87 頁）を用いましたが、本稿ではよりわかりやすくするために、岡田他（2015、8 頁）の要約を利用しています。「先述の」とか「先述の通り」などの部分は本論の叙述言及とは関係しないので、（ ）に括ってあります。
- 3) 矢口以文氏からは「私の学院時代のことも書いてある本が出版されましたので、送ります。小幡君にも読んでもらい、批評してもらいたかったのですが…」という内容の 2009（平成 21）年 2 月 2 日付きお手紙をいただき、自著の英文著書 *THE WING-BEATEN AIR* を寄贈していただきました。
- 4) 次のように記されています。

Rock-a-bye bady on the tree top.

When the wind blows

the Cradle will rock.

When the bough breaks

the Cradle will fall

—And down will come bady, cradle and all.

- 5) 講演では、ブリッグズの漫画の最後のコマの吹き出し文 “…rode the Six hundred” に特定して、この歌が連想されるとして二つ目の教材例として引用しました。これは上のテニソンの詩の一節への言及とする小林の解説の方が正しいと考えられるので、削除してもよいものです。しかし、前の二つの教材全体から、この最後の教材も筆者には連想されるので、削除せず三つ目の教材例として、最後に掲載しました。

主な参考文献

- Briggs, Reynold (1983) , *When the Wind Blows*, Penguin Books.
- ブリッグズ、レイモンド作 / 小林忠夫訳 (1982) 『風が吹くとき』 篠崎書林
- 二谷廣二 (1977) 『すぐ使える教室英語—実例と用法』 開隆堂出版
- 学校法人東北学院 (1989) 『東北学院百年史』
- _____ (1990) 『東北学院百年史資料篇』
- _____ (1991) 『東北学院百年史各論篇』
- _____ (2017) 『東北学院の歴史』 河北新報出版センター
- 平河内健治 (1986) 「語法研究—英語の常識と英語世界の常識」『東北学院大学論集 (英語英文学)』 第 75 号
pp.161-174
- カルダイ編集部・武内弘道 (1979) 『ああ東北学院—“学院”なくして東北の今は語れない』 カルダイ社
- 村上伸 (2014) 『ヨハネの黙示録を読もう』 日本基督教団出版局
- 村野井仁 (編著) (2018) 『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』 大修館書店
- 日本英学史学会 (2018) 「ホームページ」
- 大谷泰照 (2007) 『日本人にとって英語とは何か』 大修館書店
- 岡田圭子、ブレンダ・ハヤシ、嶋林昭治、江原美明 (2015) 『基礎から学ぶ英語科教育法』 松柏社
- Rogers, Carl (1977) *Carl Rogers on Personal Power*, Delacorte Press, New York.
- ロレンス, ルイス作 / 小幡光正訳 (1987) 『灰のまつえい』 篠崎書林
- 齋藤孝 (2004) 『コミュニケーション力』 岩波書店
- 鈴木弘志 (1995) 『英語のまちがい』 英友社
- 高橋秀悦 (2018) 『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学—富田鐵之助のアメリカ体験』 日本評論社
- 谷川俊太郎 (訳) 堀内誠一 (イラスト) (1975) 『マザー・グースのうた第 2 集』 草思社
- 東北学院大学英語英文学研究所 (1980-2018) 『東北学院英学史年報』 第 1 号～第 39 号
- 俵万智 (1987) 『サラダ記念日 俵万智歌集』 河出書房新社
- The Holy Bible*, Authorized or King James Version, John C. Winston Co.
- Workman, R. D. and W. R. Arnold and I. L. Bennett (eds.) (1941) *The Hymnal*, A. S. Barnes & Co. Inc.
- Yaguchi, Yorifumi (2008) *The Wing-Beaten Air — My Life and My Writing*, Good Books.
- 湯浅学 (2013) 『ボブ・ディラン—ロックの精霊』 岩波書店

534

Shall We Gather at the River

Beautiful River 8787 With Refrain

REV. ROBERT LOWRY, 1826-1899

ROBERT LOWRY, 1826-1899

1. Shall we gath-er at the riv - er Where bright an-gel feet have trod;
 2. On the mar-gin of the riv - er, Wash - ing up its sil - ver spray,
 3. On the bos-om of the riv - er, Where the Sav-iour-King we own,
 4. Soon we'll reach the sil - ver riv - er. Soon our pil-grim-age will cease

With its crys-tal tide for-ev - er Flow-ing by the throne of God?
 We will walk and wor-ship ev - er, All the hap - py gold - en day.
 We shall meet, and sor - row nev - er 'Neath the glo - ry of the throne.
 Soon our hap - py hearts will quiv - er With the mel - o - dy of peace.

REFRAIN

Yes, we'll gath-er at the riv - er, The beau-ti - ful, the beau-ti - ful riv - er;

Gath - er with the saints at the riv - er, That flows by the throne of God.

The Life Beyond

495

0-191

【資料】教材例—BLOWING IN THE WIND を用いて—

【基礎知識】

■ 疑問詞 How の用法

疑問詞の中でも、how は後ろに形動詞や副詞を付けて敬や量、あるいは程度を尋ねる表現になります。非常に便利な表現ですので、ぜひ覚えておきましょう。日本語に訳すときには「何…」とか「どのくらい」といった表現になります。

- how many (数を問う) how much (量を問う・金額を問う)
- how far (距離を問う) how fast (速さを問う) how deep (深さを問う)
- how tall (背の高さを問う) how old (年齢を問う・年齢を問う) etc.

(例) How many people are there in the hall? ホールには人が何人いますか。
How far is it from here to the station? ここから駅の駅までどれくらい遠いですか。
How long will it take you to finish the work?
その仕事を終えるのにどれくらい時間がかかりますか。

(ステップアップ)

■ 接続詞 before と until (until)

時を表す接続詞 before は「…の前に」という意味で時を表す使い方が基本ですが、もともと物事の前後関係を表す表現ですから、「～してから…する」という風につながります。今回の曲でも日本語としては「…の前に」とするよりは「～してから」と捉えるほうが自然な日本語になります。

(例) Tony finished his work before he went to bed. トニーは仕事を終えてから寝た。
How many roads must a man walk down before you call him a man?
男はどれほどの道を歩きつづければ真の男と呼ばれるのだろう。

一方、継続を表す接続詞 till (until) は「…まで」とある行為が継続していることを表しますが、これも物事が起こった前後関係をあらわす表現ですから、「～してはじめて…する」のように表現できる場合があります。

(例) How many deaths will it take till he knows that too many people have died?
どれほどの人が死んで初めて人は人が死にすぎたと判るのだろうか。

【こぼれ話】

■ フォークソングの神様

ボブ・ディランは1941年に生まれ、彼は独学でギターを学び、1960年代に反戦歌を歌い、注目を浴びました。その後、彼は数々のアルバムを出しましたが、彼の曲はビートルズやローリング・ストーンズなどのグループを始め、多くの歌手に大きな影響を及ぼし、ディランはフォークソングの神様と呼ばれる存在となりました。

“Blowing in the Wind”はPPM(Peter, Paul & Mary)が歌ったヒットしました。他にステイビィー・ワンダーもカバーしています。そのモータウンはもちろん戦争の批判にあります。冒頭の一部、

“How many roads must a man walk down before you call him a man?”

とは兵士が戦地を歩き回る姿を想像させます。また、

“How many deaths will it take till he knows that too many people have died?”

は、戦争によって、殺戮を繰り返す人類の愚かさを痛烈に批判しています。

BLOWING IN THE WIND

Written and performed by Bob Dylan

TASK: 曲を聴き、 [] 内に適語を入れましょう。(4)-(6)は rhyme に注意しましょう。

How many roads must a man walk down before you [1. call] him a man?

How many seas must the white dove sail before she [2. sleeps] in the sand?

Yes, n' how many times must the cannonballs [3. fly] before they are forever banned?

The answer, my friend, is blowing in the wind.

The answer is blowing in the wind.

Yes, n' how many years can a mountain exist before it is washed to the [4. sea] ?

Yes, n' how many years can some people exist before they're allowed to be [5. free] ?

Yes, n' how many times can a man turn his head and pretend that he just doesn't [6. see] ?

The answer, my friend, is blowing in the wind.

The answer is blowing in the wind.

Yes, n' how many times must a man look up before he can see the [7. sky] ?

Yes, n' how many ears must one man have before he can hear people [8. cry] ?

Yes, n' how many deaths will it take till he knows that too many people have [9. died] ?

The answer, my friend, is blowing in the wind.

The answer is blowing in the wind....

© Copyright 1982 by Special Rider Music
The rights for Japan licensed to Sony Music Publishing (Japan) Inc.

JASRAC 出 1414581-401

[Words & phrases]

dove: 鳩 Yes, n': Yes, and exist: 存在する
ban: 禁止する pretend: ふりをする

1	2	3
4	5	6
7	8	9

2018 年度

第 23 回 キリスト者教員研修会報告

第 23 回キリスト者教員研修会プログラム

日時：2019年1月10日（木）14：00～19：30

場所：土樋キャンパス 8号館第1会議室

総合司会 大学宗教主任 原田 浩司

時間・会場	内 容
14：00～14：30	<p>開会礼拝</p> <p style="text-align: right;">司会・説教 大学宗教主任 吉田 新</p> <p>讃美歌 讃美歌 21 469 番</p> <p>聖 書 ペトロの手紙1 3章 13～16 節</p> <p>説 教 「心を乱さない」</p> <p>祈 祷</p> <p>讃美歌 讃美歌 21 88 番</p>
14：30～15：30	<p>主 題</p> <p>「大学礼拝説教についての研修（1）」</p> <p style="text-align: right;">担当 宗教部長 野村 信</p>
15：30～15：50	<p>コーヒーブレイク</p>
15：50～17：50	<p>自由討議</p> <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 阿久戸 義愛</p> <p>発題をめぐって</p>
17：50～18：00	<p>休憩</p>
18：00～19：30	<p>クリスチャン・フェローシップ</p> <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 木村 純二</p> <p>閉 会</p>

大学礼拝説教についての研修（1）

2019年キリスト者教員研修会

2019年1月10日

宗教部長 野村 信

〔1〕 説教の構成 様々な切り口

どのように説教の筋を構成するか。いろいろなパターン、切り口があり、自由に取捨選択して構成する。

聖書からのメッセージを汲み上げると共に、特に！学生の立場、状況を考慮して内容を構成する。

- (1) キリスト教学 I の講義の流れに沿って、テーマを選ぶ。〔⇒ 旧・新約聖書、歴史、教理の順〕
例えば、講義で、旧約聖書のアブラハムを学んでいる時には、その関連箇所を引用する。講義で新約聖書のイエスの生涯を扱っている時には、山上の説教とか、たとえ話、饗食など。
- (2) 教会歴に沿って、主題を選ぶ。
復活節にはキリストの復活と昇天を、ペンテコステには、教会の誕生の箇所を選ぶとか、10月の末には宗教改革について、アドベントの頃には、福音書の最初を選ぶなど。
- (3) 季節や自然の変化を合わせて導入する。梅雨の季節の雨の恵み、夏の暑さ、秋の実り、冬の厳しさ、春の出発など。さらに動植物の営み、あるいは自然災害や地球、環境の問題など。
- (4) キリスト教の教理などからテーマを選ぶ
例えば、『組織神学辞典』には、愛とか希望とか、罪とか、復活というテーマが数多くあり、それを主題にして、「神の愛」とか、「隣人愛」など、話を構成する。これにはたくさんのテーマがあり、それに関連する小話、逸話など話題に事欠かない。ギリシャ神話、日本の昔話の例話他。
- (5) 学生たちの声や意見、話題になっていること、またリクエストに応じて、説教を構成する。
- (6) 人権、差別、流血、貧困、環境問題、温暖化、政治・経済といった時事的・社会問題を話題にする。しかし、これは事柄が複雑で評価が変化する場合や対立する意見もあり、礼拝説教では慎重に扱う。
- (7) テレビ、新聞、マスコミ、映画、アニメ、などから刺激性、関心度の高いものを選んで展開する。
- (8) 自分の奉仕活動、学会での話題、外国旅行・留学、様々な自己の体験を話題として挙げる。

〔2〕 〔1〕に関連する聖書テキストを探す。

話題やテーマから聖書に関連する箇所を探すという方向。つまり、〔1〕のパターンを念

頭に置きつつ、聖書の中に、それに関連する箇所を探す。9.11の時は、平和、和解、共生、貧困、武器の放棄、戦争の悲惨さなどに関連する箇所が選ばれた。3.11の時は、繰り返し、試練や苦難、忍耐、希望などに言及する聖書箇所が選ばれた。聖書の中には人間と世界に必要なあらゆるメッセージが宿っている。すると聖書の解釈が問題となる。これは〔4〕で論じよう。

〔3〕 聖書のストーリーを語り直す、ないしはわかり易く噛み砕いて、平易に説く。

選択した聖書の箇所を、そのまま語り直すことがより有効な説教もある。福音書における様々な出来事。

例えば、旧約聖書ならアブラハムに関する出来事、ヤコブの生涯、夢解きヨセフの不思議な生涯、モーセの活躍、出エジプト、十戒と掟、シナイ砂漠での出来事、ダビデの栄光と挫折、ソロモン…、ヨブの苦難、詩編の賛歌、箴言の金言、預言者イザヤ、エレミヤの活動…、これらは平易に説くことで、十分なメッセージをもっている。説教の最後に要点の確認や倫理的な勧めを加える。新約聖書では、イエスの荒野の誘惑、漁りの記事、病人の癒し、山上の説教、5000人の饗食、たとえ話類、十字架への道、死と復活、使徒言行録の様々な出来事、書簡類の信仰、教理などから説教を構成する。

〔4〕 当該聖書テキストのメッセージから、〔1〕を展開する方向

当日の説教箇所として選んでいる聖書本文（テキスト）をよく読む。場合によっては他の邦訳、さらに英語などもよい。原語で読めば、文面に現れてこない含意・示唆があることに気づく。現代は専門家以外でもこれは可能である。さらに、大切なことは、そこに書かれている言葉の背景、出来事、著者と著者を取り巻く社会、その信仰共同体が伝えようとしているメッセージを深く、豊かに想起する。そこには筆舌に尽くしがたい大きな出来事が、すなわち人々の感動と熱意、喜びと平和、献身と奉仕、忍耐と訓練が横たわっている。何よりも、まず、それを引き起こした神の働き、キリストの恵みが先行していることを認識する。聖書の著者・編者たちは、自分たちのことよりも、もっと伝えたいメッセージがあり、それを熱心に、簡潔に、さらに信仰告白（1コリント15：1-11、フィリピ2：6-11、2テモテ2：8-13他）として書き留めた。これらは、その後、信条、教理となって教会の柱の一つとして確定されていく。「福音主義」はこのような視点にたつ。

キリストの弟子を始めとして、初代のキリスト者たちは、周囲の人々ばかりでなく、後世の人々に、神の働きとそれに応答する自分たち信仰者のあり方を伝えようと願って、キリストの出来事と神の働きを言語化した。そこで後世の人々、すなわち、我々は、聖書のテキストからこの世界と一連の取り組みを想起し、これに共感することがまず求められる。共感し、共鳴し、自分もまたこの世界に（神への信仰という共通な心をもって）生きることを通し、すなわち神の恵みと幸いに豊かに浴し、その喜びと力を受けることが肝要である。この時に、

説教者もまたメッセージを語る力と姿勢を授かる。このようにしてテキストから、テキストが語られた原意、原世界を想起し、神の大いなる働きを感じ取り、それをキリスト教の視点から（教理的な土台を踏んで）会衆（学生たち）に適応し、説教する。

しかしながら、この方法に習熟するためには、「神学の学び」が必要である。しかし、仮に長年神学を修めたとしてもこれ分かる、この世界を感じる事が出来るとは限らない。「神を信じる信仰」と「言語のもつ構造」を体得することが必要だからである。しかしながら、このことは逆に神学の学びを修めていなくても出来る。そのためには、**1)** 聖書の解説書、聖書の注解書、聖書考古学、古代世界解説など、まずその世界の背景を教えてくれる今日の膨大な研究書がある。外国の書物は、歴史的社会的な領域では、あくまでも年代や地理、様々な論点も確定されているわけではなく仮説である、と但し書きをつけているところが、謙虚である。**2)** 説教集が数多く出版されているので、それらを参考にする事は様々な点で有効である。**3)** 教理がどのようなものであるか、「使徒信条」、「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」とか、「ジュネーヴ信仰問答」、「ハイデルベルグ・カテキズム」など、さらに現代は日本人の手による易しい教理問答書がいくつもある。

このような作業を通して、聖書のメッセージを感じ取る、読み取る作業が必要である。繰り返すが、これは神学校に行かなくても、神学の研鑽を積まなくても、出来る作業であり、そのために少なくとも、多くの説教を耳で聞くことを通し、また易しい注解書を読んで、聖書のメッセージを汲み上げる作業が求められる。それを骨格に（土台にして）説教を、分かり易く、〔1〕の例話やパターンを加えて構成する。

【終わりに】

今も、大学礼拝の説教に関して、学生が書いた言葉が胸に残る。「無駄話をしないでください」と。

説教に関して大切なことは、その説教をすることで、説教者自身が強められ、力を得てさらに外へ、人々へ向かって行くように促されることが望ましい。会衆を感動させ、信仰心を抱かせようと力むことは避けたい。大学礼拝には他宗教の人々も出席している。語られた結果、それがどのように聴衆（学生）に影響するかは神の働きの内にある。さらに説教は決して呪文でも、託宣、詔でもないで、それを語って立ち去るような、いわゆる「言い放つ」態度は避けたい。何よりも、信仰をもって語っている説教者自身が、さらに献身と奉仕、喜びと幸いに満ちて、人々（学生たち）の中に入って、多くの責務（我々の場合は教育や指導）を担い、キリストの愛に根差した共同体（交わり）を広げていく、そのような性質のものであることを願う。

【開会礼拝説教】

「あるものを存分に使う」

2015年1月22日

大学宗教主任 野村 信

出エジプト記第16章1節～8節

イスラエルの人々の共同体全体はエリムを出発し、エリムとシナイとの間にあるシンの荒れ野に向かった。それはエジプトの国を出た年の第二の月の十五日であった。荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

モーセとアロンはすべてのイスラエルの人々に向かって言った。「夕暮れに、あなたたちは、主があなたたちをエジプトの国から導き出されたことを知り、朝に、主の栄光を見る。あなたたちが主に向かって不平を述べるのを主が聞かれたからだ。我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか。」

モーセは更に言った。「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」

ヴィクトール・エミール・フランクル (Viktor Emil Frankl、1905年 - 1997年) は、オーストリアの精神科医、心理学者でした。ドイツのナチスヒットラーのもので、ユダヤ人迫害によって、強制収容所で生活させられました。戦後、著作を多数発表し、特に『夜と霧』で世界中に知られるようになりました。一連の著作で、フランクルは、精神科医として、窮地におかれた人がいかに困難を乗り越えるかを語りましたが、その教えは、一般に、ロゴセラピーと呼ばれています。それは、簡単に言えば、「生きる意味を問うことで、心の病をいやし、新しく出発すること」です。つまり、人生をどのように生きるかではなく、与えられた人生

の中でいかに生きれるか、という視点に立つことが大切だというわけです。

私たちの人生の歩みの中で、しばしば、あれがない、これが足りない、これがダメだとつぶやき、この問題さえ解決できたらうまく行くと思いがちですが、逆に、あれがないままに、これが足りないまま、これが欠けている、という問題の多い状態の中で、何が出来るのか、その制限内で、どれだけ十分に、楽しく生きられるか、充実できるか、やっでたらんと、人生が我々に問うている、と考えるわけです。

その一例が、フランクルの収容所の中での取り組みでした。強制収容所という過酷で、極限状態におかれ、働けなくなればガス室に送られるという命がけの日々を過ごしていました。フランクルは、無理にでも働けるように元気そうに振舞わなければなりません。地面には陶器の破片くらいは落ちていますから、それを拾って、ひげをそります。当然、血が出てきますが、その血で顔を拭いて、赤ら顔にし、血色の良い顔色に見せるという努力もしました。多くの仲間が失われていく中で、フランクルは最後まで、あきらめず、精一杯努力して生き抜いたのです。

ないものや、不自由や、欠点に対して不平を言っても、何も解決しない、ということは少なくありません。いや、むしろ、今あるものを存分に使って私たちは生きていますか。しばしば、自分が持っているものは、当然のように思い、まるで納屋にでもしまうかのように、使わずに大事にとっておくということがあります。そこで、今あるものをもっと有効に使い、存分に使って充実と良い成果を上げる、ということが何よりも第一に欠かせないことです。

同じことを言っている人に、乙武 洋匡（おとたけ ひろただ、1976年～）さんという方がおられます。日本の作家、タレント、東京都教育委員、NPO 法人グリーンバード新宿代表、元教職員、元スポーツライターと、いろいろな肩書をもっている人で、テレビにも良く出てくる方です。この人の書いた『五体不満足』はベストセラーになりましたが、最近出版された本に『自分を愛する力』という題の本があり、教えられるところが多い本です。その中で、次のような主旨のことが言われています。

障害のあることは不自由であっても、決して不幸ではない。

無いものを嘆いていても何も実りはない、

あるものを存分に使おう。

画家で詩人の星野富広さんも、全身は不自由ですが、口に絵筆やペンを咥えて絵を描き、詩作を続けている方です。その働きとメッセージは、多くの人々に勇気と力を与えています。毎年のカレンダーや画集は本屋の店頭で置かれています。

先ほどお読みしました聖書には、イスラエルの人々がエジプトから脱出して故郷カナンに帰郷していく、いわゆる出エジプトの記録が記されています。40年の長きに亘る彼らの道中において、彼らが毎日得たものは、朝にマナ、夕にうずらという食物でした。出発してす

ぐに、わずかな食糧に対して民らは不平と怒りを発しましたが、しかし、確かに彼らはその食糧で養われ、無事に故郷に帰還できたのです。あるものを感謝して受け止め、置かれたところで精一杯に、それぞれの勤めに励むということは、神の求めるところです。なるほど、道中には、希望らしきものも、輝かしいものもなく、ただ砂漠の広がる世界を彼らは、旅していました。その向こうには約束された王国が待っていましたが、眼前に広がる世界は砂漠でした。指導者モーセは、年老いて故郷を眼下に見つめながら、生涯を終えたのです。しかし、民を故郷へ連れ帰るという大役は、果たし終えた満足と感謝にあふれたことでしょうか。後は次の世代が継承してくれるのです。大切なことは、人生に対する眼差しであり、何よりも私たちの創造主、導き手、救済者なる神への信仰と信頼です。私たちは人間以上にはなれないのです。この時代以外、この環境以外で生きることはできません。

私たちの大学も、宗教の活動においても、確かに、無いもの尽くしになってきた感があります。しかし、あるものを十分使っているかという点、その点、もっと工夫や努力すべきことはたくさんありそうです。そこで、今あるものを大切に、あるものをもっと有効に使うべきでしょう。よりよく活用して、進んでいく、これが新年度に向けて取り組むべき大切な点です。

【発題】

「新年度の歩みについて」

2015年1月22日

大学宗教主任 野村 信

- ＜三原則＞
- 1、「学生のために」を目指す。
 - 2、「変えるべきこと」は変え、「変えてはいけない」ことは変えない。
 - 3、「明確な軸」と「豊かな広がり」をもつ。

【1】三原則の解説

1 「学生のために」を目指す。

学生たちが聖書の教えによって豊かに成長し、満足できる4年間を過ごした、という実感を抱けるように努力したいと思います。本学の学生を対象とした「学生の意識調査」によると、数値的には芳しいものではないというデータが出ています。大学礼拝とキリスト教学、さらに多様なキャンパス・ミニストリーが、「学生たちの資質の向上」に役立つように、細

やかに気を配り、彼らの声に耳を傾けていくことが大切です。本学の建学の精神とその内容であるキリスト教教育が充実したものであることが、結局大学の評判を上げ、受験生の獲得、OB、OG たちからの母校への感謝と支援を得る近道です。卒業時の意識調査の評価が低いのは、改善の余地が大いにあることを示しています。

2 「変えるべきこと」は変え、「変えてはいけない」ことは変えない。

「変えるべきこと」と「変えてはいけない」ことは、車の両輪であり、一方だけが主張されても車は道をまっすぐに前進できません。両者の同時進行的な取り組みが不可欠です。そこで、効果の出るように「変える」ためには、まず「変えてはいけない」ことをしっかりと確認しておきましょう。それは、「毎日の大学礼拝」の充実です。特に、最初が肝心で、入学式、オリエンテーションの礼拝を良く準備し、心をこめて学生たちに礼拝の大切さを伝える取り組みが大切です。学生たちが大切な一時であると最初に自覚できることで好スタートを切れます。さらに「キリスト教学」と諸行事です。これらは別の機会に論じることになります。このような三つの軸を充実させ、不動の柱とすることで、次に、多変に変えるべきことを論じることができます。それは、特に、出版物の新鮮さや催し物などの変化、工夫があって良いと思います（詳細は後述）。

3 「明確な軸」と「豊かな広がり」をもつ。

本学の建学の精神とその内容は、「聖書に基づいたキリスト教教育」ですが、その精神を随所に豊かに広げる努力が必要です。神学的に言えば、20世紀は一点集中主義でしたが、21世紀は、一点から全体へ実り豊かに広げるような方向が望ましい。一点集中は、緩んだ世界には効果的ですが、豊かな継続を求める世界には、多様化、共生の視点が欠かせません。さもないと、すでに日本だけでなく、世界的な傾向となっていますが、プロテスタントの減少、衰退が著しい。平和な時代の一点集中は、overdefensive（過剰防衛）になり過ぎ、ゲッター化する危険性があります。

以上、新年度の歩みについては、この三原則を心に留め、宗教活動に取り組みたいと考えています。

【2】具体的方針：「あるもの」をもっと有効に使い、「衰えたもの」を活性化する。

そこで、具体的にどのように取り組むかを考えましょう。先の開会礼拝でも語りましたように、「あるもの」をもっと有効に使い、「衰えたもの」を活性化する姿勢を基本に据えます。概略は以下のようになります。

「在(あるもの)…」(1) **大学礼拝** 礼拝の充実（大学礼拝の神学的な基盤を確立すべきです。礼拝の形式や説教は、もう少し弾力性のある多様性がある方が良い。

- (2) **聖書研究会** キ等学生は属することを前提とすべし。多様多様な性格。主催する先生方の多用な取り組みと継続性を奨励したい。
- (3) **諸行事** (2 colleges、昼食会) 二つのカレッジの内容の充実を目指しましょう。夏は学生に広範に呼び掛けること。
- (4) **教職員修養会** プログラムを見直し、内容の充実を図る。特に、二日間をもっと有効に使うために、夜の部も何かもうける。
- (5) **印刷物** チャペルニュースを年に3回発行。新しい記事を入れ、興味を惹くように務める。ガイド、説教集も同様に取り組む。
- (6) **礼拝堂** (Chapel hour, Lunch Time Concert…) 「学生のために」開放。もう少し、入りやすいイベントや、時間を設定したい。
- (7) **小礼拝堂、資料室** 「学生のために」使用可(青学の学生部屋)キリスト教資料室を有効に活用したい。小礼拝堂も何か考えたい。
- (8) **その他** (キリスト教学…) 「学生のために」なっているか授業参観。キリスト教学担当教員の講義の工夫やアドバイスの交換など。

「衰えたもの」…

- (1) **聖歌隊** 新年度は0から出発となりますので、私が旗振りをします。
- (2) **キリスト者等推薦学生(の会)** … (ネーミング必要か、部屋も必要)
- (3) **教職員への礼拝、聖書研究会**を開くことが期待される。
- (4) **総合人文学科**のもつキリスト教性をもう少し前に押し出すべきです。

2、将来の課題


- (1) 「キリスト教音楽」
 - i) 器学(オルガン)は、非常に盛んである。しかし、
 - ii) 声学(合唱)は、学生の指導者も不在で、甚だしく弱い。
- (2) 「キリスト教美術」 … 視覚的に弱く、まだ不備である。
- (3) 「キリスト教文学」 資料室を活用したい。
- (4) 「キリスト教活動」 学内での何らかの交流。
- (5) その他、宗教センターの将来の設置や学生たちの集まれる場所の確保。

以上、時間のかかることも多いですが、少しずつ進めていきたいと考えています。(終わり)

2018 年度

第 44 回 サマーカレッジ

2018年度 第44回サマーカレッジ アクティブリゾーツ 宮城蔵王
 テーマ：「キリスト教と現代～もっと身近なキリスト教～」

8月3日(金)		8月4日(土)	
		7:30	朝食(各自、バイキング) *各室フロントでチェックアウトを済ませ、荷物を持って集まること。 ～忘れ物のないように～
9:00	集合(土樋キャンパス H305教室) ☞開会礼拝 参加者自己紹介	9:00	☞朝の祈り
9:30	東北学院史資料センター(ラーハウザー礼拝堂地下)見学	9:20	<講演Ⅱ> 「現代のキリスト教とジェンダー/セクシュアリティー# Me Too 以後を考える」 講師：藤原佐和子(東北学院大学宗教学部) 場所：アクティブリゾーツ宮城蔵王
10:00	<講演Ⅰ> サマー・カレッジ公開講演 「キリスト教と現代-TGでの学びが明日を変える」 講師：西間木順(東北学院榴ヶ岡高等学校宗教主任) 場所：土樋キャンパスホーイ記念館 H202教室	10:45	グループ討論② ※講演Ⅱの学びを深める
11:40	☞バスでアクティブリゾーツ宮城蔵王に移動 オリエンテーション	11:30	報告・アンケートの記入
12:50	昼食	12:00	☞閉会礼拝
13:30	グループ討論① ※講演Ⅰの学びを深める	12:30	昼食
14:30	チェックイン・休憩時間	13:30	☞バス移動 アクティブリゾーツ宮城蔵王出発
15:00	レクリエーション ビーチボール・フットサル ソフトボール DVD鑑賞など ※学生に企画・運営させる(晴天・雨天) サマカレ実行委員会(サマカレ会)	14:00	蔵王近郊での野外体験活動 ※雨天の場合・・・サマカレ会に考えさせる 宮城蔵王キツネ村 
16:30	自由時間：入浴など (※野外体験活動の場合 17:30 から 18:00 まで自由時間とし、証の時は夕食後へ)	16:00	☞バス移動 出発
17:30	証の時・テーマ別懇談 上級生の経験談をシェア	17:30	土樋キャンパス着 解散
18:30	夕食		
19:30	讃美の時 ※学生に企画・運営させる サマカレ実行委員会(サマカレ会)		
20:15	レクリエーション ※学生に企画・運営させる サマカレ実行委員会(サマカレ会)		
21:00	☞夕べの祈り(野村宗教部長)		
21:30	解散 ☆就寝☆		

2018（平成 30）年度
東北学院大学宗教活動報告

2018（平成30）年度東北学院大学宗教活動報告

1. 教員組織

宗教部長	野村 信
書記	原田浩司
土樋担当	川島堅二、北 博
多賀城担当	木村純二、原田浩司
泉担当	阿久戸義愛、藤原佐和子、吉田 新
キリスト教文化研究所所長	川島堅二
総合人文学科長	出村みや子
大学オルガニスト	今井奈緒子

2. 大学礼拝

大学礼拝

月～土曜日 10時25分～10時45分（土樋、多賀城、泉）

寄宿舍礼拝

月曜日 19時30分～20時00分（泉女子寄宿舍）

火曜日 19時30分～20時00分（旭ヶ岡寄宿舍、泉寄宿舍）

年間総出席者数

キャンパス	2018（平成30）年度			2017（平成29）年度			2016（平成28）年度		
	総数	回数	平均	総数	回数	平均	総数	回数	平均
土樋(朝)	16,315	181	90	20,328	181	112	15,156	180	84
多賀城	22,107	181	122	24,729	180	137	17,094	180	95
泉	62,079	181	343	59,124	181	327	53,352	180	296
土樋(夜)	0	0	0	0	0	0	835	32	26
大学礼拝	100,501	543	185	104,181	542	192	86,437	572	151
寄宿舍	2,821	86	33						
合計	103,322	629	164						

[備考]・春季・秋季特別伝道礼拝、大学祭礼拝、大学クリスマス礼拝を含む。

・平均値の小数点以下四捨五入。

総回数 629 回〔3 キャンパス (543 回)・寄宿舍 (86 回)〕

－礼拝司会者内訳－

学外 (牧師)	254 回
学内	375 回

－学内者内訳－

理事長・学長、院長、キリスト者教員、学生など	91 回
宗教部関係者	284 回

－宗教部関係者内訳－

宗教部長	29 回 (含大学祭礼拝)
阿久戸義愛大学宗教主任	27 回
北博大学宗教主任	30 回 (含大学祭礼拝)
川島堅二大学宗教主任	29 回
木村純二大学宗教主任	20 回 (含大学祭礼拝)
原田浩司大学宗教主任	29 回
藤原佐和子大学宗教主任	28 回
吉田新大学宗教主任	28 回
出村みや子総合人文学科長	29 回
鐸木道剛先生	29 回
今井奈緒子先生	6 回

3. 春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

土樋キャンパス

2018 (平成 30) 年 5 月 9 日 (水) 10 時 10 分～11 時 00 分 546 名出席
説教者 東野尚志牧師 (日本基督教団聖学院教会)

多賀城キャンパス

2018 (平成 30) 年 5 月 8 日 (火) 10 時 10 分～11 時 00 分 682 名出席
説教者 鈴木道也牧師 (日本基督教団花巻教会)

泉キャンパス

2018 (平成 30) 年 5 月 8 日 (火) 10 時 10 分～11 時 00 分 1,424 名出席
説教者 東野尚志牧師 (日本基督教団聖学院教会)

4. 秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

土樋キャンパス

2018 (平成 30) 年 10 月 11 日 (木) 10 時 10 分～ 11 時 00 分 250 名出席

説教者 菅原哲男氏 (社会福祉法人光の子どもの家理事長)

多賀城キャンパス

2018 (平成 30) 年 10 月 10 日 (水) 10 時 10 分～ 11 時 00 分 304 名出席

説教者 鈴木重良氏 (社会福祉法人仙台キリスト教育児院院長)

泉キャンパス

2018 (平成 30) 年 10 月 11 日 (木) 10 時 10 分～ 11 時 00 分 1,003 名出席

説教者 菅原哲男氏 (社会福祉法人光の子どもの家理事長)

5. 第 30 回泉キャンパスクリスマス

日 時 2018 (平成 30) 年 12 月 7 日 (金)

18 時 30 分より (18 時開場) 約 370 名参加

場 所 泉キャンパス礼拝堂

司式者 原田浩司先生 (大学宗教主任)

奏楽者 菅原淑子先生 (礼拝オルガニスト)

説教者 水田雅敏牧師 (日本基督教団仙台川平教会)

説教題 「イエスさまの誕生」

聖 書 新約聖書 ルカによる福音書 第 2 章 8 節～ 20 節

6. 大学クリスマス

土樋キャンパス

204 名出席

日 時 2018 (平成 30) 年 12 月 13 日 (木) 15 時 00 分より

場 所 ラーハウザー記念東北学院礼拝堂

司式者 北博先生 (大学宗教主任)

奏楽者 大泉真理先生 (礼拝オルガニスト)

説教者 朴憲郁先生 (東京神学大学特任教授)

説教題 「天に栄光、地に平和」

聖 書 新約聖書 ルカによる福音書 第 2 章 8 節～ 20 節

多賀城キャンパス

310 名出席

日 時 2018 (平成 30) 年 12 月 14 日 (金) 10 時 25 分より

場 所 多賀城キャンパス礼拝堂

司式者 藤原佐和子先生 (大学宗教主任)

奏楽者 亀井睦子先生（礼拝オルガニスト）
説教者 朴憲郁先生（東京神学大学特任教授）
説教題 「御子の貧しさは私たちを豊かにする」
聖書 新約聖書 コリントの信徒への手紙二 第8章9節

泉キャンパス

約 254名出席

日時 2018（平成30）年12月13日（木）10時25分より
場所 泉キャンパス礼拝堂
司式者 野村信先生（宗教部長）
奏楽者 加藤晶子先生（礼拝オルガニスト）
説教者 朴憲郁先生（東京神学大学特任教授）
説教題 「天に栄光、地に平和」
聖書 新約聖書 ルカによる福音書 第2章8節～20節

7. 第23回スプリング・カレッジ

土樋キャンパス開催

日時 2018（平成30）年4月7日（土）15時00分～17時30分
場所 土樋キャンパスホーイ記念館3階 H305教室
内容 土樋キャンパス所属のキリスト者等推薦学生へのガイダンス
開会礼拝 北大学宗教主任
挨拶 野村宗教部長

キリスト者等推薦学生の心得・義務の説明 原田大学宗教主任

- ①年間宗教行事への参加（必須）について
- ②大学礼拝への出席について
- ③聖書研究会か聖歌隊のいずれかへの加入について
- ④出席教会の確定と報告について
- ⑤その他（統一教会への注意など）

学生7名、教育職員8名、事務職員2名 計17名参加

泉キャンパス開催

日時 2018（平成30）年4月14日（土）14時40分～18時30分
場所 泉キャンパス礼拝堂（1階）小礼拝堂、会議室
内容 泉キャンパス所属のキリスト者等推薦学生へのガイダンス
開会礼拝 川島大学宗教主任

挨拶 野村宗教部長

キリスト者等推薦学生の心得・義務の説明 吉田大学宗教主任

- ①年間宗教行事への参加（必須）について
- ②大学礼拝への出席について
- ③聖書研究会か聖歌隊のいずれかへの加入について
- ④出席教会の確定と報告について
- ⑤その他（統一教会への注意など）

学生 16 名、教育職員 8 名、事務職員 2 名 計 26 名参加

8. 第 44 回サマーカレッジ

日 時 2018（平成 30）年 8 月 3 日（金）～8 月 4 日（土） 1 泊 2 日

場 所 アクティブリゾート宮城蔵王

主 題 「キリスト教と現代—TG での学びが明日を変える」

講 師 東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任 西間木順先生

参加者 学生 20 名 教職員 9 名（宗教部長、大学宗教主任、事務局）

計 29 名参加

9. 第 63 回教職員修養会

日 時 2018（平成 30）年 9 月 3 日（月）～9 月 4 日（火） 1 泊 2 日

場 所 アクティブリゾート宮城蔵王

主 題 「キリスト教学校のプレゼンス 旧約聖書から考える」

講 師 学校法人関西学院 院長 田淵結先生

参加人数 136 名

10. キリスト者等推薦入学生との懇談会

日 時 2018（平成 30）年 7 月 3 日（火） 泉キャンパス

学生 18 名ほか 計 27 名参加

2018（平成 30）年 12 月 4 日（火） 泉キャンパス

学生 11 名ほか 計 19 名参加

11. 礼拝奉仕者懇談会（事務職員）

土樋キャンパス 2018（平成 30）年 5 月 31 日（木） 11 時 00 分～ 11 時 20 分

松本学長、吉田大学宗教主任ほか 計 25 名参加

多賀城キャンパス 2018（平成 30）年 5 月 22 日（火） 11 時 00 分～ 11 時 20 分

松本学長、中沢工学部長、原田大学宗教主任ほか 計 27 名参加

泉キャンパス 2018（平成30）年6月12日（火）11時00分～11時20分
松本学長、阿久戸大学宗教主任ほか 計19名参加

12. 礼拝オルガニスト懇談会

日 時 2019（平成31）年2月18日（月）11時00分～13時00分
場 所 土樋キャンパス本館会議室
参 加 29名（礼拝オルガニスト他）

13. 礼拝司会者（牧師）懇談会

日 時 2019（平成31）年2月18日（月）18時00分～20時00分
場 所 仙台国際ホテル
参 加 37名（牧師、学内役職者他）

14. 宗教部会

開催日 2018年4月6日（金）、5月10日（木）、6月14日（木）、7月12日（木）、
9月27日（木）、10月18日（木）、11月29日（木）
2019年1月17日（木）、2月18日（月） 計9回

15. 大学宗教主任会

開催日 2018年4月29日（日）、5月15日（火）、8月10日（金）
2019年1月24日（木） 計4回

16. 聖書研究会

土樋キャンパス	川島 堅二	バイブルトーク
	北 博	旧約聖書に挑戦してみよう
	木村 純二	旧約聖書と新約聖書の対照
	出村みや子	アウグスティヌスを学ぶ
	野村 信	希語羅語聖書読書会
	原田 浩司	サマカレ会（前期）
	原田 浩司	キリスト教の基礎知識（後期）
	藤原佐和子	フェミニスト神学の視点による聖書注解
	吉田 新	聖書に学ぶ生きるヒント
	多賀城キャンパス	長島 慎二

泉キャンパス	阿久戸義愛	キリスト教と現代
	鐸木 道剛	キリスト教と物質文化
	野村 信	み言葉を慶び、歌う

17. 宗教部予算会議

日 時	2018（平成30）年11月1日（木）15時00分～17時00分
議 題	「2018（平成30）年度補正予算及び2019年度予算案について」
場 所	土樋キャンパス本館会議室
参 加	宗教部長、大学宗教主任、各キャンパス事務担当者

18. 宗教部自己点検評価委員会

(1) 2018（平成30）年度第1回

日 時	2018（平成30）年10月4日（木）15時00分～16時00分
主 題	「2018（平成30）年度（前期）宗教活動について」 「2018（平成30）年度（後期）宗教活動予定について」
場 所	土樋キャンパス本館会議室

(2) 2018（平成30）年度第2回

日 時	2019（平成31）年2月21日（木）15時00分～17時00分
主 題	「2018（平成30）年度東北学院大学宗教活動報告について」 「2019年度東北学院大学宗教活動予定について」
場 所	土樋キャンパス本館会議室

19. 青山学院大学・東北学院大学合同チャプレン代表者会

2018（平成30）年10月20日（土） 野村宗教部長：青山学院大学訪問

20. 宗教部研修会

日 時	2018（平成30）年7月12日（木）16時00分～19時30分
場 所	東北学院サテライトステーション会議室
発 題	「大学礼拝の現在と今後の在り方」
発題者	北博大学宗教主任、藤原佐和子大学宗教主任
参加者	院長、宗教部長、大学宗教主任、総合人文学科長、 総務部長、総務課長ほか 計16名

21. 第 23 回キリスト者教員研修会

日 時 2019 (平成 31) 年 1 月 10 日 (木) 14 時 00 分～ 19 時 30 分
場 所 土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室
主 題 「宗教活動の活性化再検討と大学礼拝説教について」
発題者 野村信宗教部長
参 加 教員 13 名、職員 3 名 計 16 名

22. 大学宗教委員会

日 時 2019 (平成 31) 年 3 月 8 日 (金) 11 時 00 分
場 所 土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室

23. 学長招待卒業生懇談会

日 時 2019 (平成 31) 年 3 月 12 日 (火) 11 時 30 分～ 12 時 30 分
場 所 土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室
出 席 松本学長、卒業予定者、大学宗教主任ほか

24. 『大学礼拝 (チャペルニュース)』

142 号「秋号」、143 号「クリスマス特集号」、144 号「入学・進学特集号」

25. 『キリスト教活動のハンドブック』

2019 (平成 31) 年 3 月発行

26. 『礼拝説教集』

第 23 号 (2019 (平成 31) 年 3 月末日発行)

27. 『東北学院大学宗教活動報告書』

第 19 号 (2018 (平成 30) 年 8 月 31 日発行)

28. 卒業記念礼拝

日 時 2019 (平成 31) 年 3 月 26 日 (火) 11 時 00 分
説教者 野村信宗教部長
説教題 「地の塩、世の光」

29. その他

礼拝堂管理、図書資料受入、調査回答

東北学院大学 「宗教活動報告書」

第20号（2018年度）

発行日	2019年8月31日
発行責任者	宗教部長 野村 信
編集責任者	宗教部長 野村 信
出版社	株式会社佐々木印刷所
問い合わせ先	東北学院大学総務課
〒980-8511	仙台市青葉区土樋1の3の1
	電話 022-264-6428